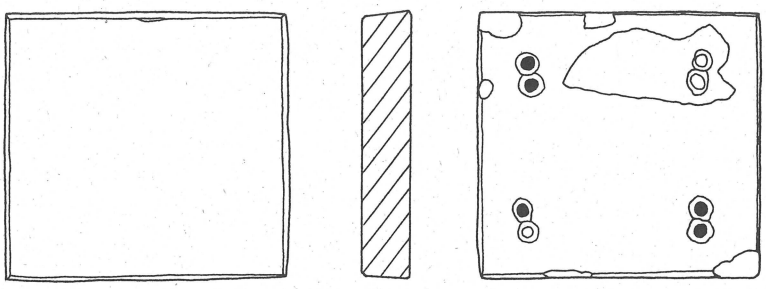
国見町文化財調査報告書(概報)　第4集

十園遺跡

じゅう　ぞの

－国見町多比良地区町営圃場整備事業に伴う発掘調査概報－

たいら



表面　　裏面

石　帯（2/3　本文59頁）

2004

長崎県国見町教育委員会

発行にあたって

このたび平成12年度から平成15年度にかけて実施しました多比良地区圃場整備事業に伴う十園遺跡の緊急発掘調査の報告書（概報）を発刊することになりました。

十園遺跡は国見町のほぼ中央部に位置し，東側には土黒川が流れるなだらかな丘陵地の水田地帯に所在します。古代条里制の痕跡も見うけられるのどかな田園風景の中に遺跡が広がっております。遺跡地より南側を望めば雲仙普賢岳がそびえ，頂上付近には平成新山と名付けられた溶岩ドームが噴火の生々しさを今に伝えています。また，北側に目を移せば，眼下には有明海が広がり，佐賀県・福岡県・熊本県までも一望することができます。

十園遺跡からは，旧石器時代から中世までの幅広い時代の遺物・遺構が発見されており，特に今回報告いたします古代の掘立柱建物群につきましては，『肥前国高来郡郡衙』の可能性も秘めた遺構として注目されるものです。ご存知の通り，『肥前国風土記』に記載のある「高来郡」につきましては，現在の「南高来郡」・「北高来郡」及び「諫早市の一部」，の範囲ですが，その中心となる『郡衙』につきましては諸説もあり，不明な点が多くございました。今回の発見はその『郡衙』所在地推定に大きな成果となるだけでなく，「肥前国風土記」研究にも大きな一石を投じる資料と考えております。

国見町の緑豊かな農業地帯も，近年の農業基盤整備に伴い変貌しております。十園遺跡の含まれる多比良地区圃場整備事業も来年度（平成16年度）で完成の予定であり，来年度調査予定の道路部分（約1,000㎡）を残して大きく景観が変わってしまいました。このような情勢の中で，祖先の貴重な文化遺産を保護し，これを後世に伝えることは，私たちに課せられた重要な責務であります。

本町では，このような事態に対処するため，遺跡発掘調査を行い保存・保護に努めてまいりました。調査の成果を公開する一つの手立てとして報告書を作成いたしましたが，遺跡の宝庫といわれる本町にとりましては，貴重な歴史と文化を理解するうえで大きな役割を果たすものと期待しております。

最後になりましたが，今回の調査に当たり，地元地権者，工事関係者，大学・博物館関係の諸先生方ならびに長崎県学芸文化課のご指導に衷心より感謝申し上げ発刊のことばといたします。

平成16年３月31日

長崎県国見町教育委員会
教育長　原　宮之

発行によせて

青い空　緑の大地　紺碧の海
小鳥のさえずり　心地よいそよ風　潮の香り
自然を体いっぱいに感じられる町・・・

（国見町 HP・KUNIMI Town Guide より）

国見町は自然豊かな島原半島に所在します。町の南側には雲仙天草国立公園の一角をなす雲仙普賢岳がそびえ，緑に満ちた町内は永々と営まれた歴史ある大地に育まれ，大きな発展を遂げて参りました。

国見町は豊かな大地を資産とし農業振興に大きな力を注いでおります。特に「イチゴ」については県内一の生産力を誇り，地域農政のリーダー的役割を果たしております。町内の農耕地を整備し，後継者を育成することは今後のまちの発展に欠かせない事業であります。しかしながら，国見町には古来より先人達の文化資産である「遺跡」が多くございます。これら文化資産を守り，継承していくことは国見町のみならず周辺地域の文化振興に必要不可欠なことであることも理解しております。今回，多比良（たいら）地区町営圃場整備事業に伴って調査された「十園遺跡」は，肥前国高来郡郡衙に関連する遺跡と判明いたしました。このことは国見町が古来より地域に先駆けてリーダーシップを発揮し，現在の国見町の祖となる礎を先人達が築いてくれたことの証と考えられます。ここに，その調査成果をまとめた調査報告書が発行されるにあたり，今後ますます文化・歴史振興においても地域リーダーとしての責を果たすべく，町政の舵取りを行っていきたいと考えております。

また，国見町はサッカーなどのスポーツ振興においても地域住民の方々と多くの取り組みを行い，町民の健康と福祉の充実を図ってまいりました。国見高校サッカー部の活躍は町民に勇気と情熱を与えてくれるもので，地域住民の大きな誇りとなっております。

国見町には産業・文化・スポーツの各分野において町民の支えとなるべく大きな柱があります。今後も町民の皆様と一致団結し，豊かな未来のために，文化遺産を継承し，農地を拡充し，心身を練磨してより良い暮らしを求めつづけていきたいと考えております。

「活気あふれ，こころ優しい人々が集うまち国見町」

を目指しこれからも邁進する所存であります。本書の発行によせて，僭越ながら一言ご挨拶を述べさせていただきました。本書が一人でも多くの方々の目にふれ，本町の歴史理解の一助となることをご期待申し上げます。

平成16年３月31日

長崎県国見町長　渡　邉　秀　孝

例　　言

1．本報告は2000年～2003年（平成12年度～平成15年度）に実施した多比良地区町営圃場整備事業に伴う長崎県南高来郡国見町に所在する十園遺跡の緊急発掘調査の報告（概報）である。

2．調査は国見町教育委員会が担当した。
調査は1999年１月21日から1999年１月28日（平成10年度）に範囲確認調査を実施し，その結果をもとに下記の期間発掘調査を実施した。
2000年８月25日～2000年12月22日（平成12年度）　１区～15区・南地区
2001年５月11日～2002年２月９日（平成13年度）　16区～21区・Ｃ区
2002年８月１日～2003年２月10日（平成14年度）　22区～38区
2003年６月５日～2003年12月25日（平成15年度）　39区～47区

3．調査体制は次のとおりである。

調査主体	国見町教育委員会	教育長	阿比留　亨（平成12年度）
	同	教育長	原　宮之（平成12年度～現在）
	同	教育次長	吉田　正昭（平成12年度～現在）
	同	社会教育係長	江副俊一郎（平成12年度～平成13年度）
	同	社会教育係長	柴崎　孝光（平成14年度～現在）
調査担当	同	文化財調査員	竹中　哲朗（平成14年度～現在）
	同	文化財調査員	松崎由紀子（平成９年度　試掘調査）
	同	社会教育係	辻田　直人

4．現地での遺構・遺物の実測は酒井由紀子・植木貴道・東　文子・林　繁美・寺中典子・村子香織・益田豊明・竹田将仁・峯　祐介・竹中・辻田が行い，遺物の実測・製図・復元は早稲田一美・濱本秀美・前田美保・酒井　恵・竹中・辻田が行った。写真は現地調査・遺物写真ともに竹中・辻田が行った。

5．遺構・遺物実測の一部は（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

6．火山灰分析・放射性炭素年代測定・植物珪酸体分析業務は（株）古環境研究所に委託した。

7．空中写真撮影業務は（株）九州文化財研究所に委託した。

8．本遺跡の遺物及び写真・図面等は国見町埋蔵文化財整理室で保管している。

9．本書で用いた方位はすべて真北であり，国土座標は日本測地系Ｉ系による。

10．現地調査および本書の刊行にあたって多くの方々からご助言ご協力いただいた，記して謝意を表します。
田平徳栄（佐賀県立博物館・美術館），木本雅康（長崎外国語大学），細井浩志（長崎活水女子大学），平川　南（国立歴史民俗博物館教授），長岡信治（長崎大学教育学部助教授），早田　勉（古環境研究所），萩原博文（長崎県平戸市教育委員会），田川　肇（長崎県教育委員会），安楽　勉（長崎県教育委員会），川道　寛（長崎県学芸文化課），古門雅高（長崎県教育委員会），本田秀樹（長崎県教育委員会），渡邉康行（埋蔵文化財サポートシステム），松本慎二（長崎県南有馬町教育委員会），大野安生（長崎県大村市教育委員会），土橋啓介（長崎県島原市教育委員会），荒木伸也（長崎県有家町教育委員会），宇土靖之（長崎県有明町総合文化会館），安楽哲史（長崎県瑞穂町教育委員会），本多和典（長崎県深江町教育委員会），福岡旧石器文化研究会，長崎県教育委員会，渡邉秀孝（長崎県国見町長），国見町産業振興課，国見町郷土史研究会，（株）野田建設（順不同）

11．本書の執筆は竹中哲朗・辻田直人が分担し，各章及び各節文末に執筆者名を記した。

12．本書の編集は竹中・辻田による。

目　　次

巻頭図版
目次
本文
図版

第１章　調査の経緯 …… 1 p
第１節　発掘調査にいたる経緯（辻田）　第２節　十園遺跡範囲確認調査（辻田）
第３節　発掘調査（本調査）の方法および経過（辻田）

第２章　遺跡の立地 …… 5 p
第１節　国見町の概要（辻田）　第２節　十園遺跡の地理的・地形的環境（辻田）
第３節　層　位（辻田）

第３章　周辺の遺跡 …… 7 p
第１節　十園遺跡周辺の考古学的成果（竹中）
第２節　小中野Ａ・Ｂ遺跡の調査成果－おとし穴状遺構・古代の溝・旧石器時代－（辻田・竹中）
第３節　専正寺遺跡の調査成果－陶硯－（竹中）

第４章　旧石器時代 …… 16 p
第１節　層　位（辻田）　第２節　遺　構（辻田）
第３節　層位出土の遺物（辻田）　第４節　層位外出土遺物（辻田）

第５章　縄 文 時 代 …… 22 p
第１節　風倒木跡（辻田）　第２節　おとし穴状遺構（辻田）

第６章　奈良・平安時代 …… 28 p
第１節　古代条里遺構関連の調査（竹中）　第２節　大型建物群と柱穴出土遺物（竹中）
第３節　溝（区画溝）・水路・自然河川と出土遺物（竹中）

第７章　中　　世 …… 63 p
第１節　生産関連遺構―製鉄炉跡―（辻田）　第２節　出土遺物（辻田）

第８章　自然科学分析（㈱古環境研究所） …… 71 p
第１節　火山灰分析　第２節　放射性炭素年代測定
第３節　植物珪酸体分析

第９章　ま　と　め …… 88 p
第１節　おとし穴状遺構（辻田）　第２節　土師器の分析（竹中）

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図(1/20,000)
第２図　範囲確認調査試掘坑配置図(1/2,500) …… 3
第３図　平成15年度までの調査区配置図(1/2,000) …… 4
第４図　基本土層図(1/10) …… 6
第５図　周辺の遺跡(1/20,000) …… 9
第６図　小中野Ａ遺跡おとし穴状遺構(1/60･1/30) ……10
第７図　小中野Ａ遺跡１区 SD01 (1/50) …11
第８図　小中野Ａ遺跡１区 SD01出土土器(1/3) ……12
第９図　小中野Ａ・小中野Ｂ遺跡出土旧石器時代石器(2/3) ……13
第10図　専正寺遺跡出土の陶硯(1/2) ……15
第11図　32区北壁土層図(1/50) ……16
第12図　32区検出 Pit 1 ・ 2 (1/80･1/40) ……16
第13図　32・33区出土石器分布図(1/80) ……17
第14図　層位出土の旧石器時代の石器(2/3) ……19
第15図　層位外出土の旧石器時代の石器(2/3) ……20
第16図　32区風倒木跡(1/30) ……22
第17図　32区風倒木跡検出縄文土器(1/3) ……23
第18図　22･25区おとし穴状遺構配置図(1/160) ……25
第19図　22・25区おとし穴状遺構(1/30) ……26
第20図　十園遺跡の条里遺構と検出遺構配置図(1/1,500) ……29～30
第21図　47区建物群と水路の位置関係(1/1,000) ……31
第22図　47区検出柱穴(1/200) ……32
第23図　47区検出建物群・柵列(1/200) ……33
第24図　47区 SB06平面図(1/100) ……34
第25図　47区 SB03平面図(1/100) ……34
第26図　47区 SB01・SB04平面図・セクション図(1/50) ……35～36
第27図　47区 SB02平面図・セクション図(1/50) ……37～38
第28図　47区 SB05平面図・セクション図(1/50) ……39
第29図　47区柱穴出土遺物(1/3) ……41
第30図　12～14区 SD01平面図(1/200) セクション図(1/30) ……44
第31図　12～14区 SD01出土土師器・坏①(1/3) ……45
第32図　12～14区 SD01出土土師器・坏②(1/3) ……47
第33図　12～14区 SD01出土土師器・坏③・坏蓋(1/3) ……49
第34図　12～14区 SD01出土土師器・高台付坏①(1/3) ……51
第35図　12～14区 SD01出土土師器・高台付坏②・坏蓋(1/3) ……51
第36図　12～14区 SD01出土土師器・甕(1/3) ……52
第37図　12～14区 SD01出土土師器・甑把手(1/3) ……53
第38図　12～14区 SD01出土土師器・竈片(1/3) ……53
第39図　12～14区 SD01出土土師器・黒色土器(1/3) ……53
第40図　12～14区 SD01出土須恵器・坏(1/3) ……55
第41図　12～14区 SD01出土須恵器・高台付坏(1/3) ……55
第42図　12～14区 SD01出土須恵器・坏蓋(1/3) ……56
第43図　12～14区 SD01出土須恵器・甕(1/3) ……57
第44図　12～14区 SD01出土須恵器・壺(1/3) ……59
第45図　12～14区 SD01出土石帯(2/3) ……59
第46図　Ｃ区 SD02・03・04平面図・セクション図(1/100) ……60
第47図　Ｃ区 SD04Ⅱ層出土土器(1/3) ……60
第48図　36区自然河川・SD02(1/100) ……61
第49図　36区自然河川土師器出土状況(1/20) ……62
第50図　36区自然河川出土土師器(1/3) ……62
第51図　19区・21区製鉄関連遺構配置図(1/100･1/2,000) ……63
第52図　21区１号製鉄炉(1/30) ……65
第53図　19区 SK-01 (石組み土坑)(1/30) …66
第54図　21区及び19区出土遺物(1/3) ……69
第55図　長崎県内おとし穴状遺構検出遺跡位置図 ……94
第56図　牟田の原遺跡位置図(1/25,000) ……95
第57図　牟田ノ原遺跡調査区位置図及びおとし穴状遺構検出地点(1/2,000) ……95
第58図　牟田ノ原遺跡おとし穴状遺構(1/50), Ｅ区東壁土層断面図及び火山ガラス比 ……95
第59図　魚洗川Ａ遺跡・魚洗川Ｂ遺跡・百花台Ｂ遺跡・百花台Ｃ遺跡・百花台Ｄ遺跡位置図(1/25,000) ……95
第60図　魚洗川Ｂ遺跡調査区位置図(1/600) ……96

第61図　魚洗川Ｂ遺跡おとし穴状遺構検出地点（1/200）……96
第62図　魚洗川Ｂ遺跡おとし穴状遺構（1/50）……96
第63図　魚洗川Ａ遺跡調査区位置図及びおとし穴状遺構検出地点（1/200）……96
第64図　魚洗川Ａ遺跡おとし穴状遺構（1/50）……96
第65図　百花台Ｄ遺跡調査区位置図（1/6,000）……97
第66図　百花台Ｄ遺跡おとし穴状遺構検出地点（1/3,000）……97
第67図　百花台Ｄ遺跡おとし穴状遺構（1/50）……97
第68図　百花台Ｂ，Ｃ，Ｄ遺跡おとし穴状遺構（1/50）……97
第69図　柿泊遺跡位置図（1/25,000）……97
第70図　柿泊遺跡おとし穴状遺構検出地点（1/400）……97
第71図　柿泊遺跡調査区位置図（1/6,000）……97
第72図　柿泊遺跡おとし穴状遺構（1/50）……97
第73図　牛込Ａ・Ｂ遺跡・鷹野遺跡位置図（1/25,000）……98
第74図　牛込Ａ・Ｂ遺跡調査区位置図（1/4,000）……98
第75図　牛込Ａ・Ｂ遺跡早期遺物分布図（1/1,500）……98
第76図　牛込Ａ・Ｂ遺跡おとし穴状遺構検出地点（1/1,500）……98
第77図　牛込Ａ・Ｂ遺跡おとし穴状遺構（1/50）……99
第78図　牛込Ａ・Ｂ遺跡おとし穴状遺構（1/50）……100
第79図　鷹野遺跡Ａ地点調査区位置図（1/1,800）……101
第80図　鷹野遺跡おとし穴状遺構（1/50）…101
第81図　鷹野遺跡調査区位置図及び地形図（1/1,500）……101
第82図　鷹野遺跡Ｂ地点調査区位置図（1/1,800）……102
第83図　鷹野遺跡おとし穴状遺構（1/50）…102
第84図　十園遺跡おとし穴状遺構（1/50）…102
第85図　小中野Ａ遺跡おとし穴状遺構（1/50）……102
第86図　十園遺跡12～14区 SD01出土土師器坏……103
第87図　十園遺跡12～14区 SD01出土土師器坏底径……103
第88図　稗田原遺跡旧河道出土土器①（1/6）…104
第89図　稗田原遺跡出土土師器坏……104
第90図　稗田原遺跡出土土器②（1/6）……104
第91図　大園遺跡出土土師器坏①（1/6）……105
第92図　大園遺跡出土土師器坏……105
第93図　大園遺跡出土土師器坏②（1/6）……105
第94図　筏遺跡出土土器（1/6）……106
第95図　筏遺跡出土土師器坏……106
第96図　石原遺跡８区Pit 出土土器（1/20･1/6）…107
第97図　島原半島における奈良・平安時代の土師器坏……107

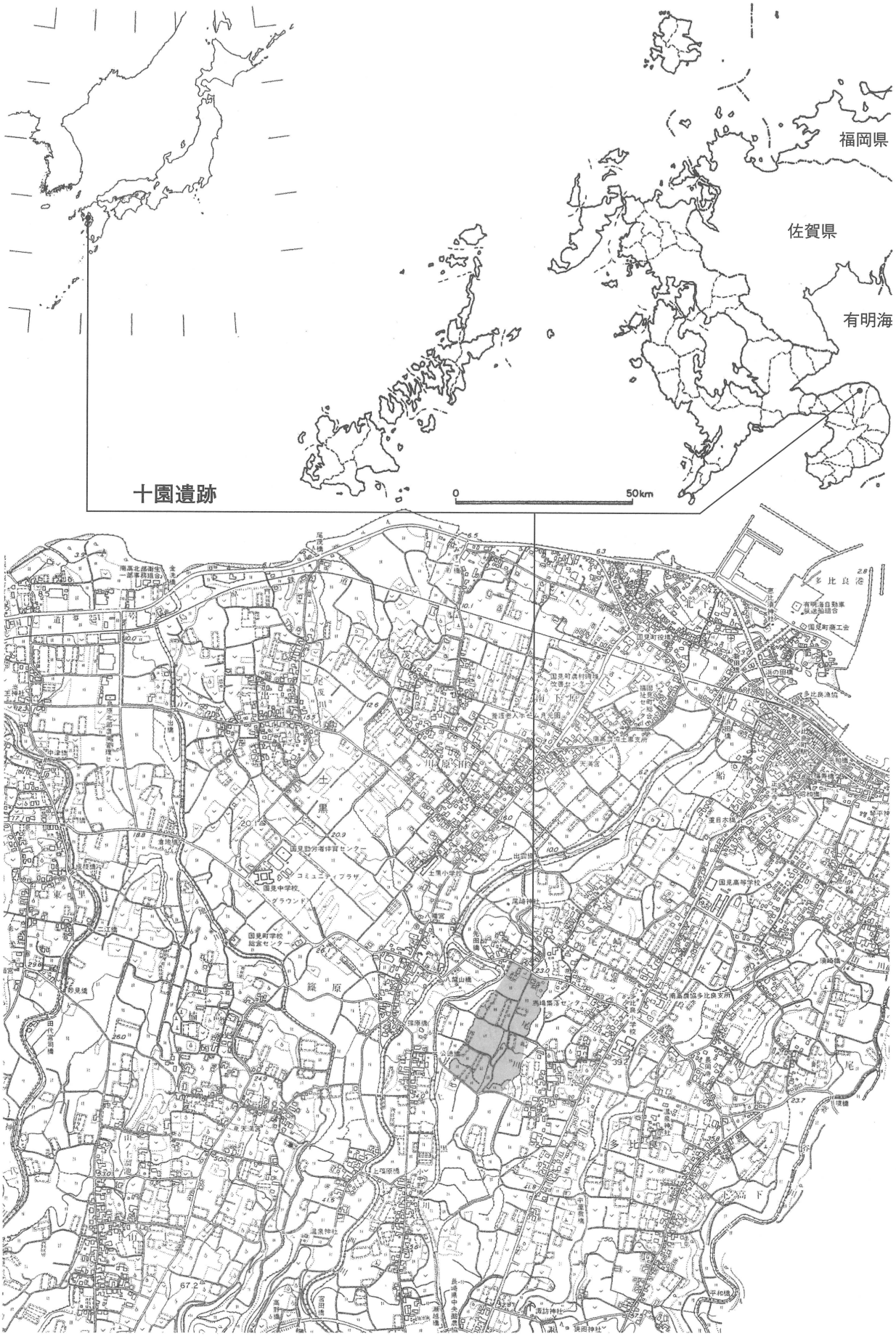
表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧……９
第２表　小中野Ａ・小中野Ｂ遺跡出土旧石器時代石器計測表……14
第３表　32区・33区旧石器時代石器計測表…21
第４表　32区風倒木跡出土早期土器観察……24
第５表　おとし穴状遺構計測表……27
第６表　47区検出建物群計測表……34
第７表　47区検出柵列計測表……34
第８表　47区柱穴検出遺物構成表①……40
第９表　47区柱穴検出遺物構成表②……43
第10表　19区及び21区出土鞴羽口計測表……69

図　版　目　次

図版１　遺跡上空写真（昭和35年度国土地理院）
図版２　調査地点（39～47区）より西をのぞむ
調査地点（39～47区）より北をのぞむ
47区建物群（SB01～06）上空写真
47区 SB01・02・03上空写真
47区 SB01・04上空写真
47区 SB02上空写真
図版３　47区 SB03上空写真
47区 SB04上空写真
47区 SB05上空写真
47区 SB01・02・03・04東上空より東上空より有明海をのぞむ条里地割との関係
図版４　小中野Ａ遺跡１号おとし穴状遺構検出面（南より）
小中野Ａ遺跡１号おとし穴状遺構（南より）
小中野Ａ遺跡１号おとし穴状遺構（西より）
小中野Ａ遺跡２号おとし穴状遺構（南より）
小中野Ａ遺跡２号おとし穴状遺構（西より）
小中野Ｂ遺跡１区 SD01検出面（西より）
小中野Ｂ遺跡１区 SD01完掘状況（南より）

小中野Ｂ遺跡１区 SD01遺物検出状況（南より）
図版５　小中野Ｂ遺跡１区 SD01検出土器(外面)
小中野Ｂ遺跡１区 SD01検出土器(内面)
図版６　32区旧石器検出状況（東より）
32区旧石器検出状況（西より）
32区北壁土層堆積状況
P-1検出状況
P-2検出状況（壁面）
遺物出土状況（第14図９）
遺物出土状況（第14図２）
遺物出土状況（第14図４）
図版７　風倒木検出状況
風倒木完掘状況
１号おとし穴状遺構検出状況
１号おとし穴状遺構完掘状況
１号おとし穴状遺構半裁状況
２号おとし穴状遺構検出状況
２号おとし穴状遺構完掘状況
３号おとし穴状遺構検出状況
図版８　47区柱穴１・２検出面
47区柱穴４・５検出面
柱２半裁
柱７検出
柱７完掘
柱52半裁
柱16完掘
柱127検出
図版９　柱127遺物出土状況
柱127完掘
13区 SD01検出状況（北より）
13・14区 SD01検出状況（北より）
13区 SD01覆土堆積土層（南より）
11～15区 SD01検出状況（北より）
13・14区中世河川検出状況（北より）
Ｃ区 SD04検出状況（南より）
図版10　35区 SD02検出・土層状況（南より）
35・36区自然河川・SD02検出状況(南より)
35・36区自然河川・SD02検出状況(南より)
35区自然河川土師器検出状況(東より)
35区自然河川土師器検出状況・拡大（東より）
21区１号製鉄炉検出面（北より）
21区１号製鉄炉「炉」部分検出面(北より)
21区２号製鉄炉検出面（北より）
図版11　21区１号製鉄炉「炉」部分長軸断面
21区１号製鉄炉「炉」B-B'断面
21区１号製鉄炉「廃滓場」炉壁等検出状況
21区１号製鉄炉「廃滓場」A-A'断面
21区１号製鉄炉「廃滓場」東壁セクション
21区１号製鉄炉完掘状況(南より)
19区 SK-01石組み土坑検出状況(西より)
19区 SK-01石組み土坑検出状況(北より)
図版12　32区・33区第Ⅵａ層・第Ⅴ層出土石器（ほぼ等倍）
図版13　十園遺跡層位外出土石器及び小中野Ａ・小中野Ｂ出土石器(ほぼ等倍)
図版14　32区風倒木跡検出縄文土器１（ほぼ等倍）
図版15　風倒木跡検出縄文土器２（ほぼ等倍）
図版16　47区検出柱穴群出土土器
図版17　47区検出柱穴群出土土器
図版18　12～14区 SD01出土土器(土師器･坏類)
図版19　12～14区 SD01出土土器(土師器･坏類)
図版20　12～14区 SD01出土土器(土師器･坏類)
図版21　12～14区 SD01出土土器(土師器･坏類)
図版22　12～14区 SD01出土土器(土師器･坏類)
図版23　12～14区 SD01出土土器(土師器･坏類)
図版24　12～14区 SD01出土土器(土師器･甕)
図版25　12～14区 SD01出土土器(土師器･竈)
図版26　12～14区 SD01出土土器(黒色土器)
図版27　12～14区 SD01出土土器(須恵器･坏類)
図版28　12～14区 SD01出土土器(須恵器･坏類)
図版29　12～14区 SD01出土土器(須恵器･坏類)
図版30　12～14区 SD01出土土器(須恵器･甕)
図版31　12～14区 SD01出土土器(須恵器･壺)
図版32　Ｃ区 SD04Ⅱ層出土土器
図版33　35区自然河川出土土器
図版34　19区・21区製鉄関連遺構検出遺物（第54図）
図版35　十園遺跡表採資料(製鉄関連遺物)
図版36　調査前（20030605）
表土・客土除去状況（20030823）
調査風景（20031020）
47区完掘状況（20031223）
国見中学校体験学習（20031118）
佐賀県立博物館　田平徳栄氏(中央)現地指導（20031211）
現地説明会(20031223午前：報道関係)
現地説明会(20031223午後：住民の皆さん)
図版37　現地説明会(20031223午後：住民の皆さん)
県立国見高校見学（20031224）
国見町長　渡邉秀孝氏来跡(20031223夕刻)
埋め戻し風景（20031224）
埋め戻し完了（20031224夕刻）



第１図　遺跡位置図(1/20,000)

第１章　調査の経緯

第１節　発掘調査にいたる経緯

平成９年度より行われていた多比良地区町営圃場整備事業の工事予定地区が，十園遺跡をその範囲内に含むため，平成10年度に国見町教育委員会が主体となり，国及び県の補助を受けて遺跡の範囲確認調査を行った。調査期間は1999年１月21日から1999年１月28日（平成10年度）までである。調査は圃場整備事業予定範囲に，任意に２ｍ×２ｍの試掘坑を16箇所（64㎡）設定し行った（第２節参照）。その結果，従来の遺跡範囲より南側に大きく遺跡が広がっていることが確認された。調査結果を基に国見町産業振興課と教育委員会で協議を行い，設計変更により遺跡の大部分は盛土により保存し，農道・用排水路および掘削により破壊される部分については本調査を行うこととなった。本調査は2000年（平成12年度）から毎年断続的に行い，2005年（平成16年度）に現地の調査が終了する予定である。

（辻田）

第２節　十園遺跡範囲確認調査（第２図）

(1)　範囲確認調査の概要

多比良地区圃場整備事業予定地区に，遺跡範囲および新規発見遺跡の確認のため，試掘調査を実施した。調査は16箇所の試掘坑（２ｍ×２ｍ）を設定し行った。調査期間は1999年１月21日から1999年１月28日までである。遺物は同一層一括で取上げ，基本的に遺構検出面までの掘削としたが，状況によっては遺構の掘り下げ，遺構検出面下位の掘削も行っている。

当地区は古くから製鉄関連の遺物が多く出土することが知られており，「多比良」という呼び名も「たたら」からきているとの説もある（多比良町郷土史）。当然範囲確認調査時に製鉄関連の遺物・遺構の検出も想定していたが，それには至らず，2001年（平成13年度）の本調査（今報告書掲載製鉄炉：第６章）まで待たねばならなかった。当地区で表面採取される製鉄関連遺物で最も目に付くものは「かなくそ」と呼ばれている「鉄滓」である。十園遺跡北側に長年住まれる元国見町文化財保護審議委員で郷土史家でもある村里義則氏によると，『幼少のころは畑一面に「かなくそ」が散らばっていて，遊びに行くといつも「かなくそ」で足を怪我していた。』また，『かなくそ坂（遺跡北側の東西に走る道路）のわき（道路の南側の畑）には「かなくそ」が２ｍ以上の高さで積まれていた。』とのことである。2000年（平成12年度）の調査では「かなくそ坂」からのびる道路わきの水田は，耕作土を除去すると厚さ10㎝ほどの鉄錆層が検出されており，積まれていた「かなくそ」から流れ出した鉄分の影響であろうか。また，日露戦争時には，鉄の確保のためその「かなくそ」を島原鉄道の貨車に載せ，製鉄所に搬入したそうだが，その量は貨物列車数十台分であったといわれている（国見町郷土史）。

(2)　範囲確認調査の成果

16箇所の試掘坑のうち丘陵中央部の平坦面に設置したTP42，TP43，TP49，TP52，TP53，TP54，TP55，から遺物・遺構の検出が見られた。遺構はおもに柱穴と考えられるPitで，その直径は40㎝ほどのものもあり，柱痕跡も確認できるものであった。また，TP42からは古代の遺物を包含する落ち込み（溝状遺構）も確認され，古代における大規模な集落跡の存在が想定された。また，従来の遺跡範囲の南側に広い範囲で遺構・遺物が広がっていることが確認され，遺跡の範囲を大きく拡大する結果となった。範囲確認調査時に判明した土層堆積は，第１層は耕作土，第２層は水田床土及び客土層，第３層は非常に薄い堆積だが黒色土の遺物包含層で古代の遺物を包含する。第４層は黄色粘質土の遺構検出面で，雲仙起源の一本松火砕流に伴う堆積層である。次章において述べる土層の状況とは若干異なる。今概報では次章で述べる土層堆積を基本するため，範囲確認調査時の土層表記は使用しない。（辻田）

第３節　発掘調査（本調査）の方法及び経過（第３図）

本調査は国土座標Ⅰ系を使用し，調査対象範囲（農道建設予定地及び用排水路建設予定地）を20mメッシュに区切り，年度毎に順次調査を実施した。しかしながら，調査区の立地条件や時間的な制約により，必ずしも20mメッシュの調査区とはなっていない。調査区は１区～47区，及び南地区，Ｃ区に分けて調査を実施した。十園遺跡は土層の堆積が薄く，表土を除去するとすぐに遺構検出面，という調査区も少なくない。第２図や図版１でも判るように，遺跡内には条里制の痕跡が残っており，古来より数度の造成工事が行われてきたのは間違いない。したがってそれ以前の包含層はほとんど取り去られ，遺構検出面も本来の高さからかなり削平されていると考えねばならない。調査では表土（水田耕作土）及びその下の水田床土及び客土を重機により除去し，その後はすべて人力により発掘した。遺物の取り上げは，基本的には同一層一括で取り上げ，旧石器時代及び縄文時代の一部の遺物についてはドットマップを作成し取り上げた。また，各時代の遺構出土遺物については可能な限り実測し取り上げた。発掘は可能な限り下層まで掘り下げ，部分的には基盤層の検出まで行った。

以下各年度の調査概要を述べる。

－平成12年度（１区～15区，南地区）－

弥生時代中期～後期の竪穴住居，環濠，土坑群，古代の溝（Ｐ44第30図）などが検出されている。弥生時代の住居は２軒検出されているが，いずれも約半分が調査区外に広がっており，全容は確認できていない。１辺約５ｍの隅丸方形と考えられ，住居の立ち上がりは約50cmを測り，非常に残りのよいものである。遺物は中期～後期と想定されるものがほとんどで，ほぼ完形に器型復元できる資料も多い。環濠はＶ字のものと逆台形のものの２条が検出されており，いずれも住居跡と近い時期に存在したと考えられる。この弥生時代の遺物・遺構については次年度（平成16年度）に報告予定である。

－平成13年度（16区～21区，Ｃ区）－

古代の溝状遺構及び中世の製鉄炉などが検出されている。いずれも今概報（第６章）で報告する。平成13年度の調査区は表土を除去するとすぐに遺構検出面となる部分がほとんどであった。前述のとおりこれまでに遺物包含層及び遺構面に達するまで削平されていることが考えられる。製鉄炉については第６章で後述するが，しっかりと検出できたものは１基のみである。そのまわりにも製鉄炉があったであろう痕跡が確認される。前述（第２節）のとおり，多くの「かなくそ」の存在からこの地に大規模な製鉄所跡があったことは間違いないであろう。

－平成14年度（22区～38区）－

旧石器時代の包含層２枚（第４章），弥生時代中期～後期の環濠集落，古墳時代初頭の住居跡などが検出されている。環濠集落の検出は平成12年度の調査によって検出されたものと同様で，この地に大規模な集落が存在していたことを確認することとなった。特筆すべき事項は環濠出土の鉄滓で，国見町における製鉄関連資料が弥生時代まで遡ることが明らかとなった。このことは次年度（平成16年度）に報告予定である。

－平成15年度（39区～47区）－

古代掘立柱建物群（第６章）及び中世～近代にかけての水路などが検出された。古代掘立柱建物群は第６章において報告するが，肥前国高来郡郡衙との関連が想定され，学術的にも重要な発見である。

（辻田）

参考文献

国見町1984『国見町郷土史』

第２図　範囲確認調査試掘坑配置図（1/2,500）

第３図　平成15年度までの調査区配置図(1/2,000)　■平成16年度調査予定範囲

第２章　遺跡の立地

第１節　国見町の概要

国見町は島原半島の北端に位置し，雲仙から有明海に向かって撥状に広がる。面積38.20㎢，人口11,812人（2004年２月末）を数える。昭和31年に「多比良（タイラ）町」と「土黒（ヒジクロ）村」が合併し『国見町』は誕生した。その後昭和32年には「神代（コウジロ）村」も加わり現在の『国見町』となっている。平成15年度からは平成17年の合併を目指して，島原半島北西部の７町（国見町，瑞穂町，吾妻町，愛野町，千々石町，小浜町，南串山町）で協議中である。新市の名称は「雲仙市」である。

国見町の基幹産業は農業で，10年ほど前からはイチゴのビニールハウス栽培が特に盛んである。その他の農作物では「八斗木（ハットギ）白ねぎ」が有名で都心の高級料亭でも需要が多い。また，以前は漁業が盛んで，明治初期から戦後までは「バッシャ船」と呼ばれる大型の木造船で東シナ海まで漁に出ていた。現在はその役目を終えた最後のバッシャ船が国立民俗学博物館に保存されている。昭和31年からは「宝の海」と呼ばれた有明海において，海苔の養殖も開始され町水産業の根幹を担ったが，現在では海苔養殖業者は激減し，多比良地区国道251号線沿いに立ち並ぶ「海苔乾燥小屋」が当時の面影を残すのみとなっている。数年前までは「タイラギ」漁も盛んに行われていたが，有明海の水質悪化が原因か，ここ数年漁は行われていない。そのほか，有明海で取れる渡りガニの「がざみ」が外洋から渡ってくる際，国見町多比良近海で収穫される時期が最もうまみが増すとされ「多比良ガネ」とよばれて珍重されている。春先には潮干狩りも盛んに行われ，最盛期には海岸が観光客で埋め尽くされ，砂浜が見えなくなるほどである。また，長崎県立国見高等学校は全国でも屈指のサッカー強豪校として有名だが，同校「考古学研究部」も島原半島を主なフィールドにこれまでに多くの調査・研究を重ね大きな成果をあげている。特に学校敷地内に考古資料館や考古博物園を建設し，古墳や竪穴住居などを地域住民と協力して製作するなど，文化財保護の啓発活動も行っている。考古資料館には旧石器時代～近世までの遺物が収蔵されており，その数は膨大で貴重な資料が多い。

－神代鍋島家－

国見町神代小路地区は佐賀鍋島家の飛地であり，今でも往時の風情を残す町並みとして観光客が多く訪れる。国見町教育委員会では，平成13年度及び平成14年度に町独自事業として長崎大学へ依頼し町並みの調査を行った。また，平成15年度には国からの補助を受け伝統的建物群保存地区として国の指定を目指して調査を行っている。地元では小路地区に居住する有志による「まちなみ保存会」が結成され，積極的に町並みを保存しようとする機運が盛り上がっている。

町のキャッチフレーズは『フルーツと多比良ガネとサッカーのまち国見町』である。　　（辻田）

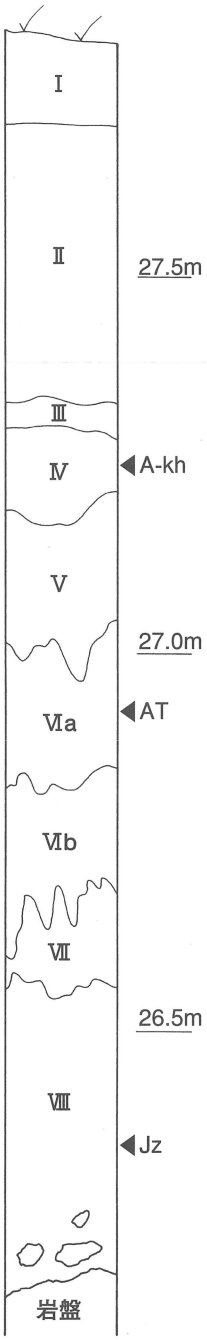
第２節　十園遺跡の地理的・地形的環境（図版１）

島原半島は長崎県南部，有明海にむかって胃袋状に突き出た半島で，雲仙普賢岳を頂点とした円錐状を呈する。半島の北側は，半島南側の急峻な地形と異なり，雲仙岳より広がるなだらかな火山性扇状地が広がり，国見町はその扇状地のほぼ中央を南北に切り取るような「撥状」の行政区となっている。町内で最も標高の高い九千部岳で1,062ｍを測り，約10㎞で有明海に達する。十園遺跡は海岸から約１㎞の距離で，土黒川東岸の低丘陵上に位置し，標高は約20～30ｍを測る。丘陵の両脇は土黒川，多比良川が北上し，その外側には比較的高位の丘陵が続く。遺跡は低丘陵の西端，土黒川の河畔に広がり，河床との比高差は５～10ｍを測る。　　（辻田）

第３節　層位（図版６）

十園遺跡の所在する丘陵は全体的にかなり削平を受けている。それは条里制の跡も見られることから，水田利用のために大小の造成工事が現在まで行われてきているためであろう。したがって第１章第２節でも述べたが，調査範囲の大半は耕作土及び水田床土を除去するとすぐに遺構検出面（第Ⅷ層）となる。ここではもっとも土層の残りの良い32区の土層堆積状況を基本として記載する。また，第７章　自然科学分析にあるように，32区付近では３箇所にわたって火山灰分析を実施しており，検出された火山灰堆積状況のデータは信頼性の高いものと考えられる。

十園遺跡基本土層（第４図）



第４図　基本土層図（1/10）

第Ⅰ層：水田耕作土。

第Ⅱ層：床土，旧水田耕作土及び客土。

第Ⅲ層：黒色土。弥生時代及び古代の遺物包含層だが，部分的にしか堆積しておらず，32区では確認できない。また，弥生時代から古代の遺物が混在するわけではなく，場所によって各時代の包含層と認識出来うるので，本来であれば２層に細分されるべきであろうが，重層して観察できる場所は検出できておらず，今概報では第Ⅲ層として取扱う。

第Ⅳ層：５YR・３／２（暗赤褐色土）あまり締りはなく，ボソボソした感じの土層。５㎜ほどの赤色土粒を含む（５％）。また，５㎜ほどの黒色粒（マンガン粒）も同様に含む（５％）。（アカホヤ火山灰降灰層準）

第Ⅴ層：５YR・３／１（黒褐色土）きめのそろった締りのよい土層で，掘るとサクサクとした感じである。炭化物が若干混入するがその他の混入物は見られない。黒曜石製台形石器が検出されている。

第Ⅵａ層：10YR・４／４（褐色土）きめのそろった硬く締った土層である。１～２㎜ほどの炭化物や角閃石安山岩を含む（１％）。下部ほど硬さが増し，部分的には上半部分が黄色っぽく，下半部分が白色っぽく細分できる。玄武岩製の剥片尖頭器が検出されている。（下半部分がAT火山灰降灰層準）

第Ⅵｂ層：10YR・３／４（暗褐色土）きめが細かく非常に硬く締まった土層。上半部分はクラックが入りボロボロと拳大のブロック状を呈し非常に掘りにくい。１㎜ほどの安山岩礫粒が少量（３％）入る。また，極少量だが炭化物も入る。掘る際には安山岩礫粒がザクザクと掘り具に当たる。

第Ⅶ層：５YR・３／２（暗赤褐色土）非常にきめが細かく，かつ，粘性が強い。混入物は見られないが，下層の第Ⅷ層との境は上下に波打ちはっきりとしない。

第Ⅷ層：7.5YR・５／８（明褐色土）１ｍを越す土層で，きめが細かく粘性が強い。下部は角閃石安山岩の礫が多く入り，さらに下部では角閃石安山岩の岩盤となる。（AT火山灰下位と考えられる雲仙起源の一本松火砕流堆積物あるいはそれに関連する降下テフラに伴う酸化角閃石。及び阿蘇火山中央火口丘に由来する可能性があるテフラ：十園テフラ（Jz）に伴う斜方輝石が検出されている。）

（辻田）

※土層記述の際の（○％）は2002年版新版標準土色帖の「面積割合」を参考にした。

参考文献

国見町1984『国見町郷土史』
小山正忠・竹原秀雄2002．２『新版　新版標準土色帖』日本色研事業株式会社

第３章　周辺の遺跡

第１節　十園遺跡周辺の考古学的成果（第５図，第１表）

十園遺跡周辺において考古学的な調査が試みられたのは戦前にさかのぼり（註１），文化財保護行政が貧弱な時代から考古学的な注目を集めている。特に**高下古墳（鬼の岩屋）・五万長者遺跡・上篠原遺跡・十園遺跡**は郷土史家や好事家によく知られた遺跡である。高下古墳の学術調査を行った小田富士雄氏の成果報告書は島原半島での横穴式石室研究の鏑矢的存在である（註２）。当古墳は，昭和34年１月19日に長崎県の指定史跡となり現在に至っている（註３）。初期の島原半島考古学研究を主導してきた古田正隆氏は1970年に**五万長者遺跡・八反田古墳（原口古墳）**の発掘調査を行っている（註４）。但し，古代瓦は，江戸時代に藩主のもとへ発見届けが出されており，その存在は近代以前からすでによく知られていた（註５）。五万長者遺跡出土瓦の小田氏による整理（註６）は，九州古瓦のなかでは老司系につながるものとして「老司亜系」とし，８世紀代中ごろを下らない年代を想定している。平成に入り長崎県教育委員会の手によって，県内重要遺跡調査の一環として範囲確認調査が行われ建物関連（版築遺構）や祭祀遺構を検出している（註７）。県立国見高等学校での教鞭を傍らに考古学研究を進めていた諫見富士郎氏は**上篠原遺跡**の調査を行い，陶質土器と多くの土師器を検出している。（註８）。陶質土器は朝鮮半島でつくられた可能性が強く（註９），供伴している土師器は年代的な指標となり得る資料である。2004年２～３月にかけて長崎県教育委員会が地域拠点遺跡として学術調査を行っている（註10）。**十園遺跡**は戦前から鉄滓を多く出土する遺跡として知られており，2003年度までにおける調査でも表土・包含層などから多くの鉄滓を検出しており，その出土量は町内の他遺跡と一線を画している。**佃遺跡**は県営圃場整備事業に伴い発掘調査が行われ，教育委員会によってその成果が新聞などで報道されている（註11）。また，長崎県教育委員会によって弥生時代後期から古墳時代の大型掘立柱建物などが紹介されている（註12）。**松尾遺跡**は町営圃場整備事業に伴い発掘調査を行い，概要報告書を2002年に刊行している（註13）。旧石器時代から古代までの遺構・遺物が検出されている。原位置を遊離した資料であるが，後期旧石器時代初頭と考えられる石器群が検出されており，同じく同様の資料が検出されている石原遺跡と並んで，県内最古期の様相を知る上で重要な資料である。旧石器時代では他に，狸谷型ナイフ形石器・枝去木型台形石器・三面加工石器などが検出されている。縄文時代では耳栓（土製耳飾），環状石斧，早期土器（条痕文土器・押型文土器・平栫様式土器）などの包含層が検出されている。なかでも加工の少ない石鏃は早期後半（平栫様式土器）に特有のもので報告書の中で「早期剥片鏃」と整理している。古墳時代では前期の住居跡が検出されており，良好な出土状態ではないが古式土師器の貴重な資料となる。須恵器では５世紀代末に位置づけられる坏身片が検出されている。また，格子目をもつ平瓦片が表土から出土しており，隣接する五万長者遺跡との関連が注目される。**石原遺跡・矢房遺跡**は県営圃場整備事業に伴い発掘調査を行い，概要報告書を2003年に刊行している（註14）。直径0.5～２ｍを越す角閃石安山岩礫群が広範囲にわたって検出され，内包する土砂の火山灰分析からAT降灰後からアカホヤ降灰前の数度にわたる土石流の産物と考えられる。原の辻型ナイフ形石器を含む石器群が集中する地点が確認されており，AT降灰後の人々の生活の一端を知ることができる。また，今年度の調査では，数は少ないもののAT降灰層準を間層に挟んで石器群が検出（未報告）されており，島原半島では百花台遺跡群と並んで層位的に旧石器時代の遺物が検出される遺跡として注目される。縄文時代では中期～後期にかけての土坑・溝，多くの土器片（早期・中期・後期・晩期）や土偶・石器が検出されている。奈良・平安時代では祭祀関連土坑，土器廃棄土坑，溝が検出され，多くの土師器・須恵器を出土している。骨蔵器と

思われる土師器・須恵器もまとまった状態で検出されており，複数の火葬墓に復元できる。文字資料では石原遺跡で「宮」と墨書された坏底部片，「益」と刻まれた坏底部片が検出されている。中世では土坑と配石と土師器坏６点がまとまった状態で検出され，当時の埋葬形態の一端を知る良好な資料である。ほかに竪型の製鉄炉が二基重なって検出されており，鞴の羽口，糸切底の坏底部，擂鉢片などが検出されている。そのほか中世期と思われる柱穴群で掘立柱建物四棟を検出している。**矢房遺跡**では古墳時代の隅丸方形竪穴式住居が検出され，床面に残された土師器・石器が多く検出され，当時の土器組成を知るうえで良好な資料である。地理的に近い上篠原遺跡との関連が注目される。

小中野（こなかの）Ａ遺跡・小中野（こなかの）Ｂ遺跡・専正寺（せんしょうじ）遺跡・猪之瀬（いのせ）遺跡は圃場整備事業に先立って行った範囲確認調査によりある程度の成果が得られている。以下に発表された資料を中心に特徴的なものを紹介しておく（註15）。**小中野Ａ遺跡・小中野Ｂ遺跡**では古代の遺構・遺物が多く検出され，刻書土器（12ｐ第８図）や墨書土器などが出土し，溝（11ｐ第７図）も検出されている。**猪之瀬遺跡**では隅丸方形の土坑が検出されており，青磁碗・青磁盤が出土している。**専正寺遺跡**では陶硯片（15ｐ第10図）が確認されている。

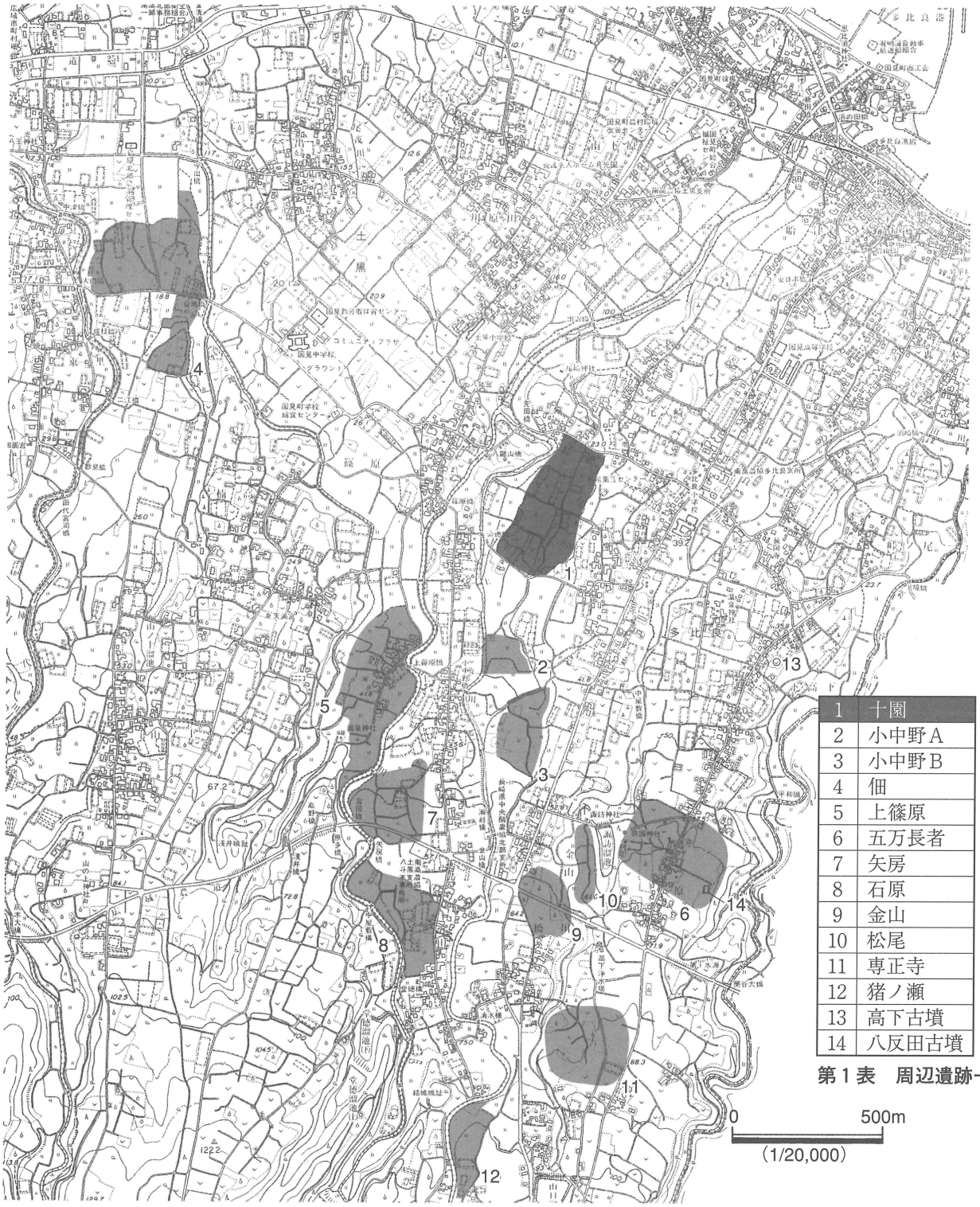
十園遺跡や五万長者遺跡周辺では旧石器時代から中世にかけての遺跡・遺構・遺物が検出されており，なかでも墨書土器や刻書土器が多く検出されており，その成果は長崎県考古学会などで発表され注目を集めている。研究発表や陶硯片の紹介の中では，周辺に郡衙的な機能が想定されている。さらに十園遺跡では規則的に配置された大型の掘立柱建物が検出されており（註16），具体的にその所在地までを言及できる考古学的な資料が整いつつある。これらの考古学的資料はいずれも『肥前国風土記』に記載された高来郡の拠点あるいは中心地（郡衙）が周辺に存在することを示唆するものである。

（竹中）

註

1　『原始古代の長崎』通史編（長崎県教育委員会編1995年）に長崎県の考古学履歴の整理がある。
2　小田富士雄編『高下古墳調査報告書』　国見町教育委員会1959年
3　『原始古代の長崎』資料編Ⅱ　長崎県教育委員会1991年
4　『国見高等学校島原工業高校共同調査概報』昭和45年度　五万長者屋敷調査協議会編
5　国見町『国見町郷土史』1984年
6　小田富士雄編「伝五万長者屋敷跡」『九州古瓦図録』　九州歴史資料館1980年
7　川道寛編「五万長者遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ｖ』長崎県文化財調査報告書第133集1997年
8　諫見富士郎編1988『上篠原遺跡』概要報告書　長崎県立国見高等学校考古学研究部1998年
9　中村浩編季『刊考古学』第24号　雄山閣出版1998年
10　上篠原遺跡の拠点遺跡発掘調査にあたった長崎県学芸文化課川道寛・柚木亜貴子両氏のご好意により，調査現場の見学をさせて頂き，1987年に行われた調査状況の確認と今回の調査での出土状態を実見させて頂いた。報告書の刊行は平成17年３月予定である。
11　長崎新聞平成10年７月26日朝刊
12　『原始古代の長崎』通史編　長崎県教育委員会1995年
13　長崎県国見町教育委員会『松尾遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第２集2002年
14　辻田直人「国見町矢房遺跡一括出土遺物について」『西海考古』第４号　西海考古同人会（長崎）2001年
長崎県国見町教育委員会『石原遺跡・矢房遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第３集2003年
長崎県国見町教育委員会『石原遺跡・矢房遺跡の発掘調査』国見町埋蔵文化財速報（第２号）2003.08
15　小中野遺跡・杉之元遺跡・石原遺跡の文字資料と専正寺遺跡陶硯，猪之瀬遺跡土坑の初出は以下の発表による。
竹中哲朗「国見町専正寺遺跡出土の陶硯」『西海考古』第５号　西海考古同人会（長崎）2003年
辻田直人「国見町遺跡―８～９世紀の墨書土器―」長崎県考古学会総会発表要旨　長崎県考古学会2001年

辻田直人「国見町猪之瀬遺跡の集石および小ピットを伴う土坑について」西海ニュース第19号　西海考古同人会（長崎）2000年
16　長崎新聞・西日本新聞・朝日新聞各社　平成15年12月24日朝刊
長崎県国見町教育委員会『十園遺跡の発掘調査』国見町埋蔵文化財速報2003．03



1	十園
2	小中野A
3	小中野B
4	佃
5	上篠原
6	五万長者
7	矢房
8	石原
9	金山
10	松尾
11	専正寺
12	猪ノ瀬
13	高下古墳
14	八反田古墳

第１表　周辺遺跡一覧

第５図　周辺の遺跡(1/20,000)

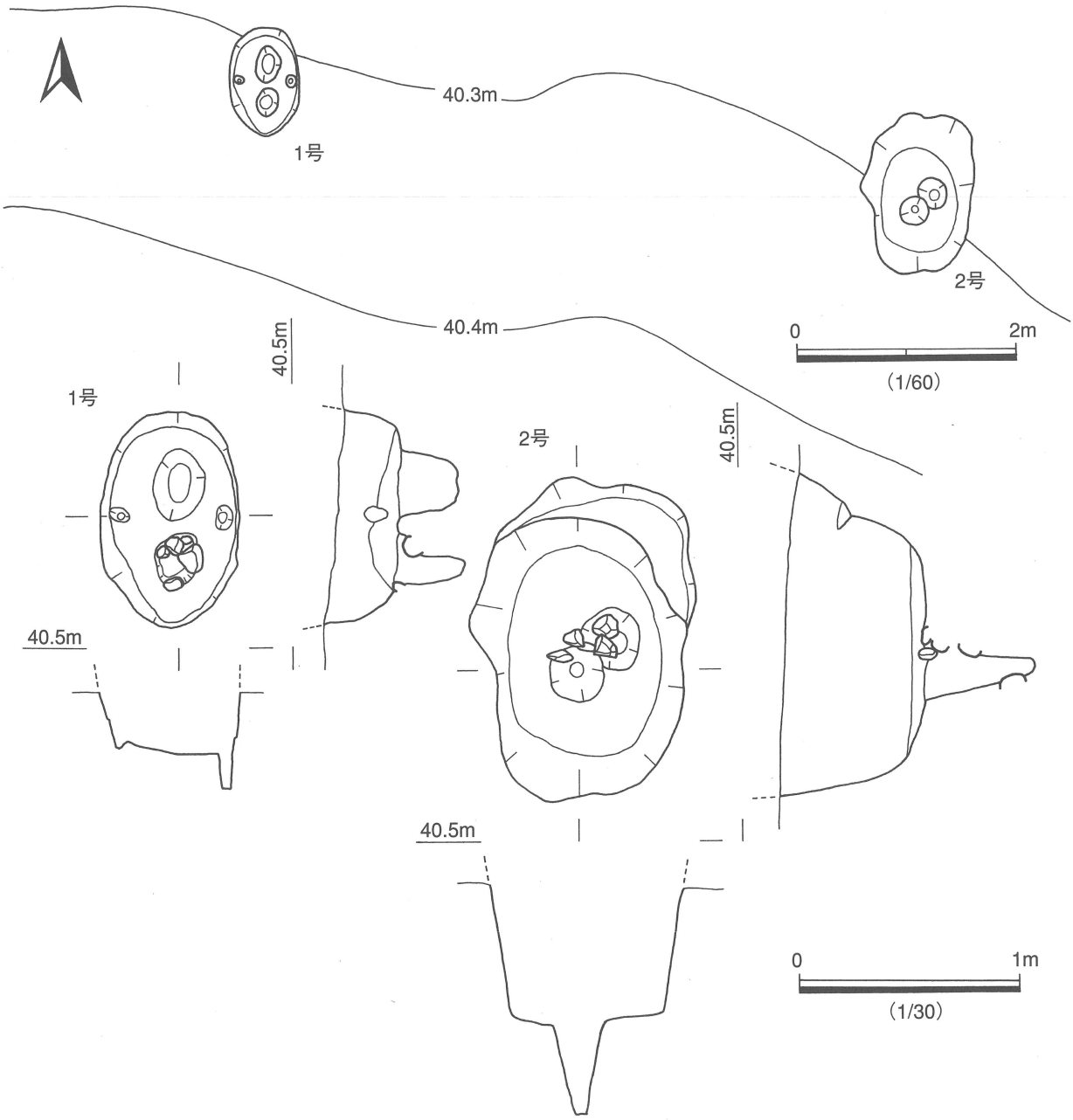
第２節　小中野Ａ・小中野Ｂ遺跡の調査成果　―おとし穴状遺構・古代の溝・旧石器時代―

１）おとし穴状遺構　―小中野Ａ遺跡―　（第６図）

十園遺跡の調査においても検出されているが，小中野Ａ遺跡においてもおとし穴状遺構（註１）が２基検出されている。調査範囲が狭小でありこれ以外にも存在する可能性が高いと考えられる。おとし穴状遺構は丘陵の平坦部に位置し，丘陵を横断するような配置を見せる。同じ標高ライン上に長軸を丘陵と並行するように配置されており，企画性が感じられ同時に掘り込まれたものと考えられる。検出面は第Ⅷ層上面だが，耕作により上層はすべて削平されており，本来の掘り込み面は不明である。しかしながら，覆土の状況は十園遺跡のものと酷似しており，時期的にも近いものと想定される。２号おとし穴状遺構の検出プランはやや歪だが，壁面の崩落等と考えられ，１号と同様の楕円形であろう。詳細については第９章第１節において後述する。　（辻田）

註

1　2004／２／14～15の第14回九州縄文研究会鹿児島県国分大会における名称の定義を踏襲している。

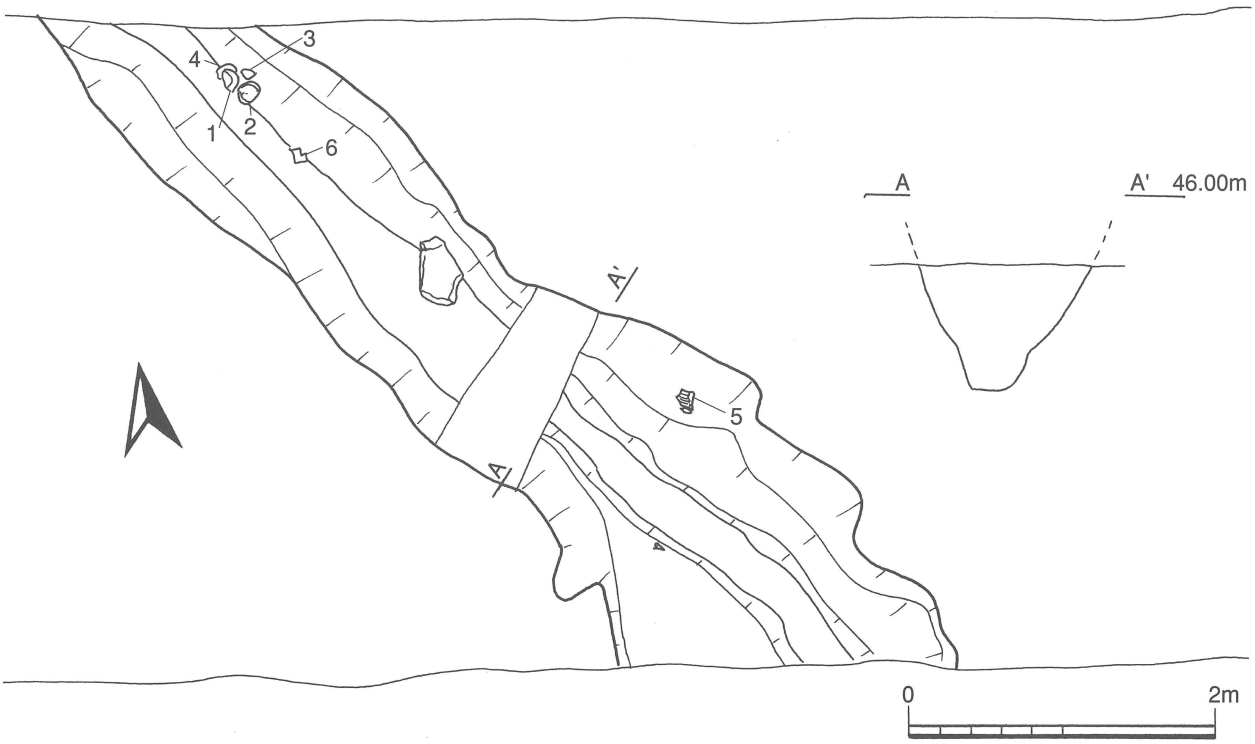


第６図　小中野Ａ遺跡おとし穴状遺構(1/60・1/30)

2）古代の溝　―小中野Ａ遺跡１区 SD01－（第７図，図版４）

小中野Ａ遺跡からは古代の遺構としてピット群や溝状遺構が検出されている。ここではまとまって土師器が検出された溝状遺構について紹介する。

SD01は遺跡の所在する丘陵中央部分の平坦部に検出された。東西に長い調査区を，南東方向から北西方向に横切るように直線的に掘り込まれている。検出された長さは約６ｍである。検出されたのは縄文晩期遺物包含層上面で，古代の生活面と考えられる。幅約1.3m深さ約１ｍのＶ字形で，底面の幅は30cm～40cmを測る。第７図の断面図では，緩やかに内湾するような形態を示すが，本来は逆に緩やかに外反するような形態を示すものと考えられる。遺構内に堆積している土層はやや乱れており，自然堆積によるものではなく人為的なものと考えられ，廃絶時に一気に埋め戻されたことが想定される。このSD01からはまとまって土師器が検出されているが，検出状況には２つのタイプが見られる。１つ目は遺構検出面においてまとまって検出されるもの。第７図１～４に見られるもので，遺構平面プラン検出時に同時に検出されており，廃絶時に何らかの祭祀等が行われ，そのまま廃棄されたものと考えられる。２つ目は第７図５・６のように内部に埋没するもので，埋め戻す際の土の中に含まれていたもので，SD01の存続時にはすでに廃棄され周囲に散乱していた遺物と考えられる。　（辻田）



第７図　小中野Ａ遺跡１区ＳＤ01(1/50)

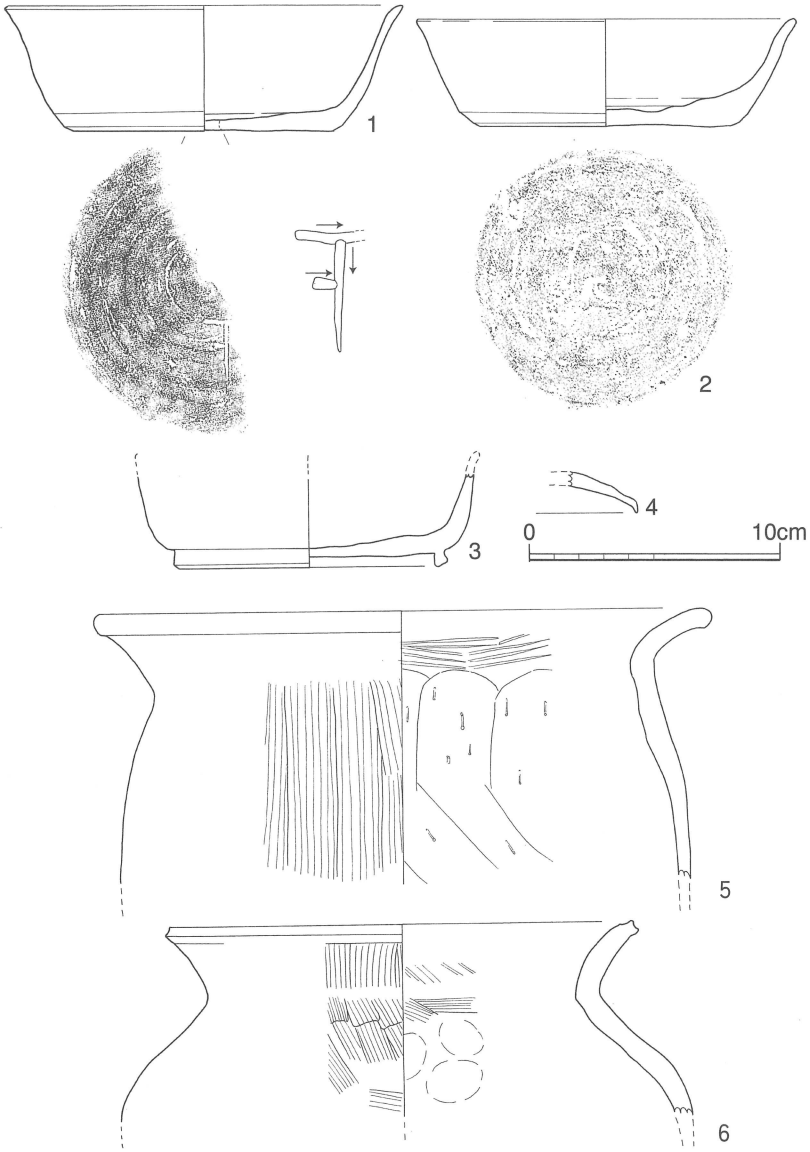
－溝出土遺物－

小中野Ａ遺跡１区 SD01出土土器（第８図１～６　図版５）

１は土師器坏で，半分ほどが失われている。口縁部直径約15.9cm，高さ約5.0cm，底部直径約10.2cm。底部外面に中心からずれた部分に刻書が確認でき，「上」と判読できるが，筆の運びは図のように復元される。口縁部直下で強く押さえられ，端部は外反する。口縁部と底部との直径の差が約５cmをはかり，深さと容積のある形態である。須恵器の模倣品である。調整は内外面回転を利用した横ナデで仕上げている。底部は回転（右方向）を利用したヘラ削りのあと軽くナデ調整を施している。回転を利用したヘラ削りは口縁部近くまで施され器壁の調整がなされ，その後回転利用の横ナデが行わ

れる。胎土は雲母・石英（２～５㎜）が多く，赤色砂が少ない。色調は浅黄橙色。

2 は土師器坏で，底部が全周する程度の破片資料である。口縁部直径約15.0㎝，高さ約4.3㎝，底部直径約10.1㎝。１と比べ器壁が厚く，口縁部端部は外反する。口縁部と底部との直径の差が約５㎝と近く，１と同じく深さと容積のある形態である。須恵器の模倣品である。調整は内外面回転を利用した横ナデで仕上げている。底部は回転（右方向）を利用したヘラ削りのあと軽くナデ調整を施している。底部内面には回転利用の横ナデによる凹凸が確認できる。胎土は雲母・石英（１～３㎜）白色粒子（２㎜）赤色砂粒子（２㎜）。色調は浅黄橙色，外面は橙色。**3** は土師器坏で，２片の接合品，口縁部のみが失われているほかは完全な資料である。口縁部直径は復元で13～13.5㎝，高さ約4.0～4.6㎝，高台直径約10.8㎝，高さ0.6㎝。口縁部と底部との直径の差が約３㎝と近く，深さと容積のある形態である。高台の断面形は方形で，高さはない。須恵器の模倣品であろう。調整は内外面回転を利用した横ナデで仕上げている。底部は回転（右方向）を利用したヘラ削りのあと軽くナデ調整を施し，高台を貼り付けている。回転を利用したヘラ削りは口縁部近くまで施され器壁の調整がなされ，その後回転利用の横ナデが行われる。胎土は角閃石・雲母・赤色砂（２～５㎜）白色粒子（0.2～１㎜）。色調は橙色。**4** は土師器坏の蓋の破片資料である。天井部の高さは約1.7㎝，口縁部直径は復元で約15㎝。調整は外面ミガキ調整仕上げ，内面は回転利用のナデ調整。胎土は雲母・白色粒子（0.5～１㎜）。色調は浅黄橙色。**5** は土師器甕口縁部から胴部中位までの破片資料で，１／３周する。口縁部直径は復元でき約25㎝，残存高約10.7㎝。胴部外面は縦方向の刷毛調整（７本／２㎝），胴部内面は幅広いヘラ削り調整。口縁部内面に横方向の刷毛調整がみられるほかは，回転を利用したナデ調整である。胎土は角閃石・石英（0.5～５㎜）白色粒子（１～２㎜）。色調はにぶい黄橙色，口縁部には煤が付着する。**6** は土師器壺で，弥生時代後期のものと思われる破片資料。口縁部直径約19㎝，残存高約7.7㎝。外面は縦方向の細かい刷毛調整，内面は指オサエ，口縁部は刷毛調整がみられる。胎土は角閃石・白色粒子（0.5～１㎜）。色調は橙色。（竹中）



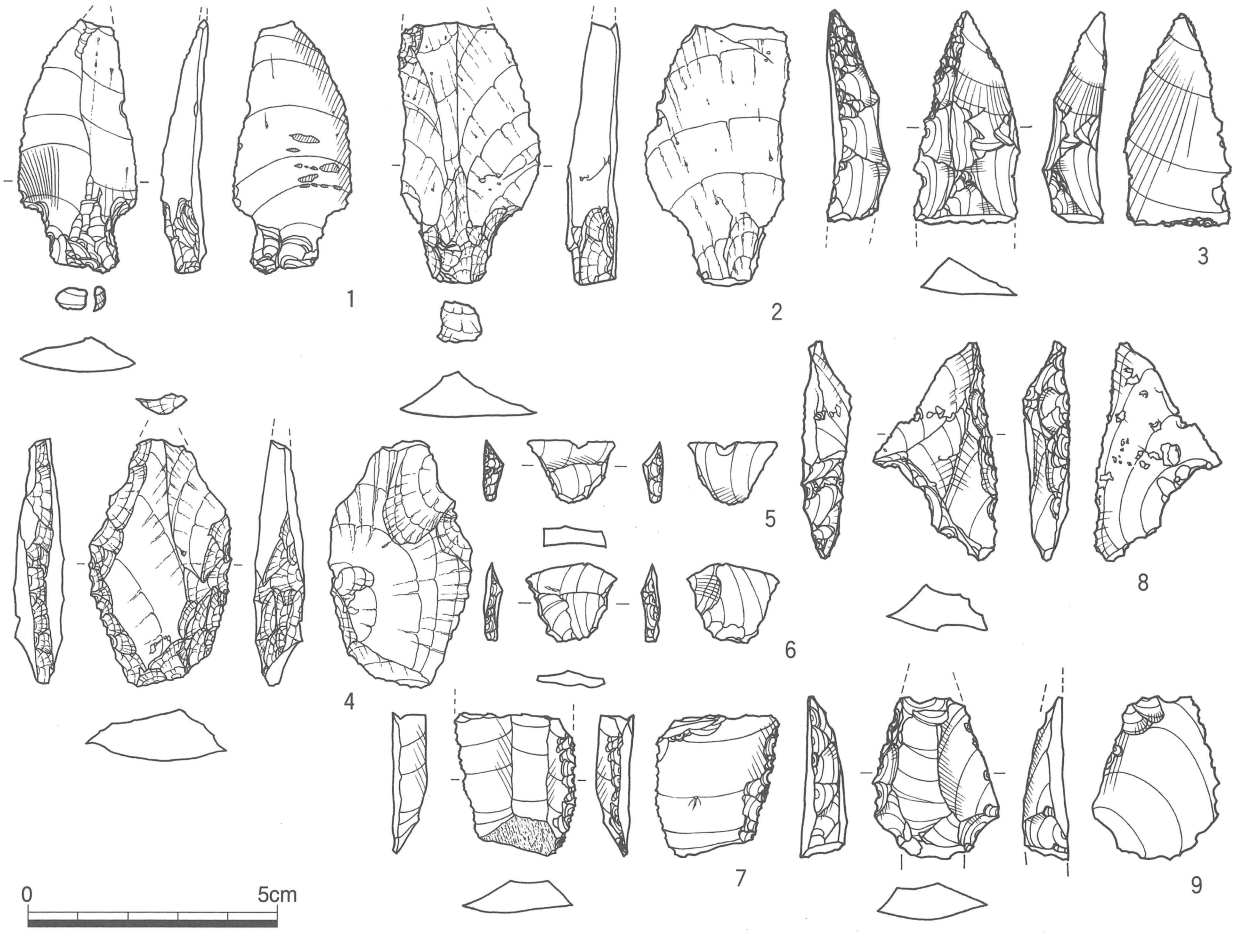
第８図　小中野Ａ遺跡１区 SD01出土土器(1/3)

3）旧石器時代　（第９図，第２表，図版13）

—小中野Ａ遺跡・小中野Ｂ遺跡—

十園遺跡の南側約400m，同じ丘陵上に位置する。標高は35m～45mをはかる。調査原因は十園遺跡と同じ多比良地区町営圃場整備事業によるものである。十園遺跡と同様に丘陵頂部の平坦面付近からの検出が目立つが，本来の包含層からの出土ではなく，古代や中世の包含層からの出土であり，原位置を遊離した資料である。しかしながら，剥片尖頭器や狸谷型ナイフ形石器，百花台型台形石器などAT降灰後に特徴的に見られる石器が多く見られ，近接して良好な旧石器時代の遺跡が存在するのは確実であろう。**1**～**7**は小中野Ｂ遺跡表土中の資料である。小中野Ｂ遺跡は縄文時代晩期から中世までの遺物・遺構が検出されており，晩期遺構検出下位の調査は実施していない。土層の深掘確認では晩期遺構確認面の下層に数枚の土層の堆積を確認しており，本来の石器出土相当層も存在すると考えられる。**8**・**9**は小中野Ａ遺跡出土遺物であるが，調査区の周囲に湧水対策の溝を重機により掘削中，その排土から検出したものである。したがって調査区周囲に旧石器時代の遺跡があることは間違いない。

1は黒曜石製の剥片尖頭器で，尖頭部を当時の折れにより若干欠損する。先細りの縦長剥片を素材とし，基部側は両側縁に主要剥離面側からの調整を行い細く舌状に整形されるが，左側縁の調整はそれほど顕著ではない。また，打面側から背面側に向かって細かい平坦剥離が多く施されている。尖頭部は素材剥片の辺縁部をそのまま残しており，素材剥片の形態を大きく変更していない。また，素材



第９図　小中野Ａ・小中野Ｂ遺跡出土旧石器時代石器(2/3)

剥片は上下方向からの縦長剥片剥離を行う石核から剥離されたもので，打面は単剥離面打面である。主要剥離面側中央部に見られる網部分は横方向の擦痕であり，着柄や使用にかかわる痕跡と考えられ興味深い。**2**は１とほとんど同じ形態の剥片尖頭器であり，石材は無斑晶質安山岩である。先端部が欠損しており長さは不明だが，１より一回りほど大きくなると考えられる。素材の縦長剥片剥離技術や基部調整についても１，２ともまったく同様の剥片剥離技術によって作成されており，石材の違いはあるが，同じ石器製作集団によるものと考えられる。**3**は下部が大きく欠損しているもののナイフ型石器とした。やや幅のある剥片を素材としており，１，２のような縦長剥片剥離技術は見られない。石材は黒色黒曜石である。左側縁を大きな剥離によって整形しているが，先端部は細かい剥離により，主要剥離面側及び背面側から調整を施している。**4**は無斑晶質安山岩製で，先端部を若干欠損するがナイフ形石器とした。横長の剥片を素材とし，左側縁は主要剥離面側から調整を行った後，上半部に背面側から２度大きな平坦剥離を施す。右側縁は打面から背面側に平坦剥離を施すが，打面を除去するまでは至っていない。打面は単剥離面打面である。**5**，**6**は黒曜石製の百花台型台形石器である。刃部形態が若干異なるもののほとんど同様の資料である。両側縁から下部にかけて主要剥離面側から細かい剥離によって整形されている。６の主要剥離面側下部は発掘調査時のガジリである。**7**は黒曜石製の削器で，上部を大きく欠損する。背面の調整から典型的な縦長剥片剥離技術が見てとれ，素材剥片剥離の前に３度の先行する剥片剥離の痕跡が見てとれる。当初は両側縁の並行する石刃状の縦長剥片だったと考えられる。両側縁に加工が施されており，左側縁は背面側から，右側縁は主要剥離面側から鱗状の細かい調整が見られる。下端には礫面が残る。**8**は不純物を多く含む質の悪い黒色黒曜石製の狸谷型ナイフ形石器である。厚い幅広の剥片を素材として，右側縁は主要剥離面側からブランティング加工を施し，一部背面側からも調整を行う。左側縁は主要剥離面側からの粗い調整により内湾状を呈す。**9**は欠損部分が多いが黒曜石製の剥片尖頭器とした。先端部は当時の欠損，基部は発掘時の欠損である。

（辻田）

第２表　小中野Ａ遺跡・小中野Ｂ遺跡出土旧石器時代石器計測表

図	番号	遺跡	層位	器　種	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
9	1	小中野Ｂ	表土	剥片尖頭器	黒曜石	5.10	2.40	0.90	7.50	縦長剥片・先端部欠損(当時)
	2			剥片尖頭器	無斑晶質安山岩	5.30	2.80	1.10	14.50	縦長剥片・先端部欠損(当時)
	3			ナイフ	黒曜石	4.20	2.10	1.20	6.80	横長剥片・基部欠損(当時)
	4			ナイフ	無斑晶質安山岩	4.90	2.80	1.00	12.20	横長剥片
	5			台形	黒曜石	1.20	1.70	0.40	0.70	百花台型
	6			台形	黒曜石	1.60	1.80	0.40	0.80	百花台型
	7			削器	黒曜石	2.80	2.35	0.70	4.80	縦長剥片
	8	小中野Ａ	深堀時	ナイフ	黒曜石	4.35	2.45	0.90	6.10	狸谷型ナイフ形石器
	9			剥片尖頭器？	黒曜石	3.20	2.50	0.90	6.00	先端・基部欠損(掘削時)

第３節　専正寺遺跡の調査成果　ー陶硯ー（第10図）

１）専正寺遺跡調査の経緯

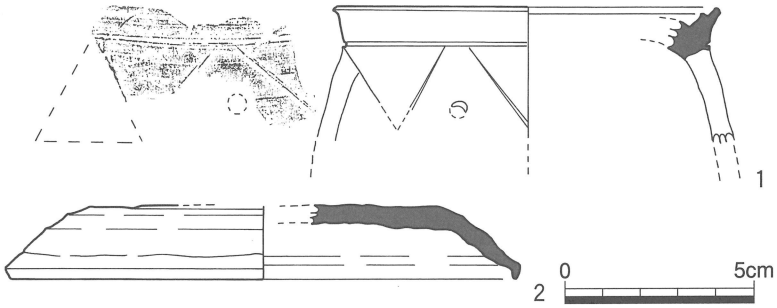
専正寺遺跡の調査は平成13年度に行っている。国見町産業振興課より「時期は決定していないが，今後圃場整備事業を行う予定であり，遺跡の範囲を確定したい。」との依頼を受け，平成14年３月に国見町教育委員会が主体となり遺跡範囲確認調査を実施した。調査の結果，縄文晩期の遺物包含層及び遺構が主に検出されている。古代・中世の遺物は遺跡内の地表や表土中に散在しているが，今回の試掘調査でははっきりした遺構の検出には至らなかった。

２）出土遺物（第10図）

専正寺遺跡の陶硯片は第３試掘坑表土出土品（第10図１）である。同じく，表土から坏蓋片（第10図２）が出土している。他にも須恵器片や土師器片が少量出土している。

１は円面硯の破片資料で，陸部や海部は失われ，外堤から脚部途中にかけて残っている。口縁部直径は復元で10cm，残存高は約3.6cm，脚部に透かし孔をもつ。外堤は貼り付けられており，端部は丁寧でしっかりと稜線がつくられている。外堤内面には一条の溝が確認できる。外堤外面には一条の細い沈線を施し，脚部との境を明瞭にしている。脚部外面には三角形の線刻が施され，外周を９等分するように復元できる。外面の沈線と線刻とは同一工具による所産と思われる。透かし孔は三角形線刻にあわせるものと三角形線刻の中央に空けられるものと二種類が確認できる。調整は内外面共に最終的に回転を利用した横ナデ調整が行われており，外堤部分内面には斜位のナデも観察できる。大宰府周辺の資料整理との比較（註１）では９世紀前半ころを中心とした陶硯片である。

２は須恵器坏蓋片である。中央部分は失われているが，つまみの付着していた痕跡は確認できる。内外面ともに回転を利用した横ナデ調整，天井部分には回転利用のヘラ削り調整が確認できる。かえり部分は短く小さく，断面三角形となる。かえり部分は扁平であるが，天井部分は盛り上がっており比較的深みのある形態である。８世紀後半代の年代が想定できる（註２）。　（竹中）

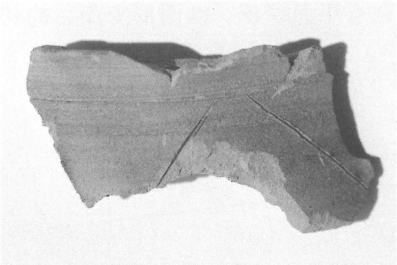


第10図　専正寺遺跡出土の陶硯(1/2)

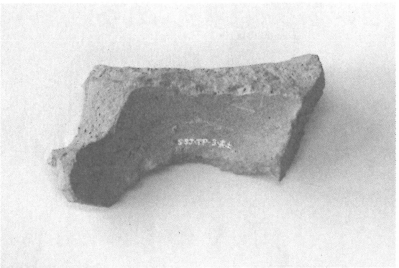
註

1　横田賢次郎「福岡県内出土の硯について」『研究論集』９　九州歴史資料館(大宰府)1983年

2　舟山良一「牛頸窯跡出土須恵器」九州土器研究会発表要旨　九州土器研究会2000年



専正寺遺跡出土の陶硯（表面）



専正寺遺跡出土の陶硯（裏面）

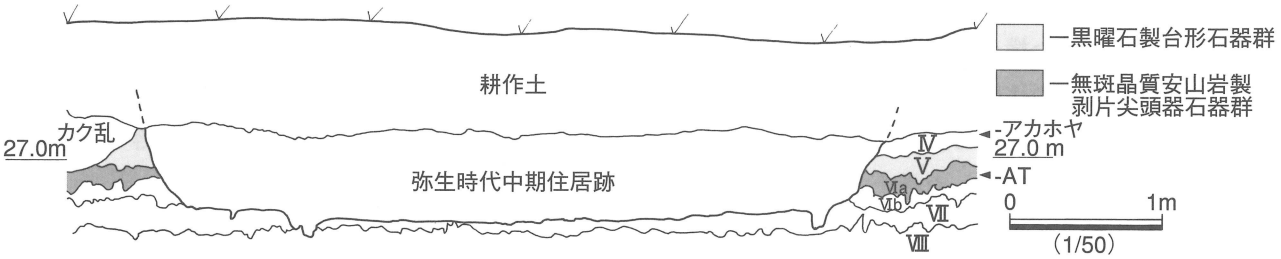
復元品（濱本秀美作）

第４章　旧石器時代

第１節　層位（第11図，第８章，自然科学分析）

十園遺跡の層位は，前述したが調査地点によって大きく変異し一様ではない。旧石器時代の遺構・遺物の検出された32区・33区は，遺跡内でも最も土層堆積の安定した地区で，かつ，後世の掘削等が見られず良好な旧石器時代遺物包含層が検出されている。また，火山灰分析によってアカホヤ火山灰やAT火山灰降灰層準も検出されており，出土遺物の時期決定に大きな指標となっている。

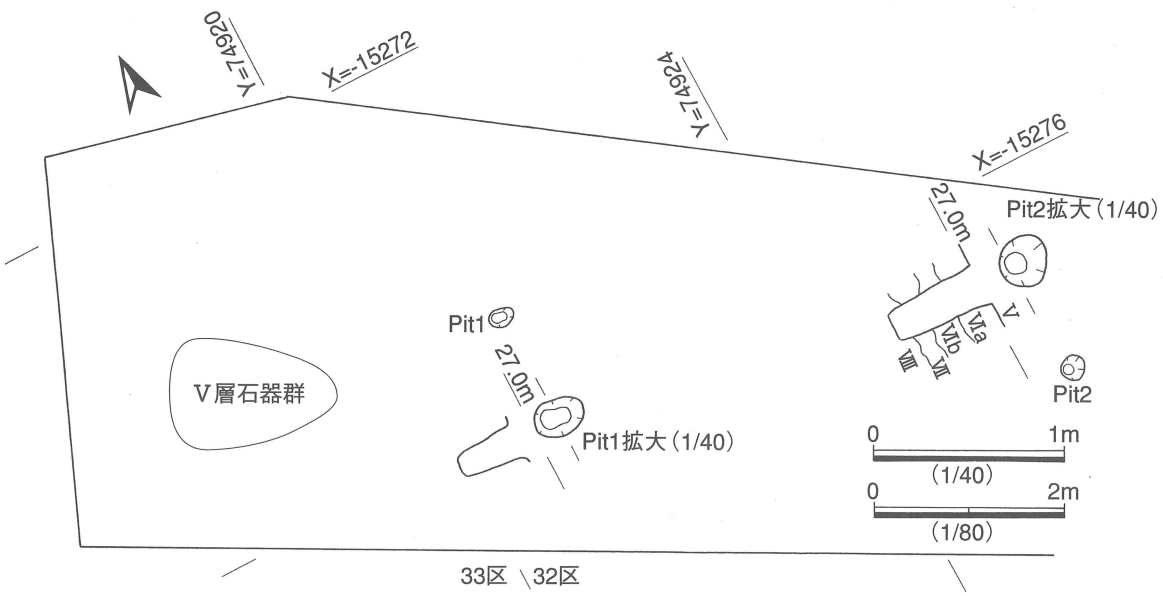
第11図は32区北壁の土層堆積状況である。第Ⅳ層上部がアカホヤ火山灰降灰層準，第Ⅵａ層下部がAT火山灰降灰層準と火山灰分析結果が出ている。また，第Ⅷ層以下にはAT下位の雲仙起源の火砕流堆積物あるいはそれに関係する降下テフラの可能性のあるテフラも検出されている。第11図の中央の掘り込みは弥生時代中期の住居跡で，当初の遺構掘り込み面は耕作によって削平されているものの，アカホヤ火山灰降灰層準である第Ⅳ層を掘り込んでいる。したがって，土層観察の面から見れば縄文時代早期以降の遺構と理解することができ，弥生時代中期の住居跡として層位的な矛盾はない。火山灰分析の結果からは層位の逆転現象などの矛盾点は見当たらず，後述する今回２層にわたって発見された旧石器時代の遺物については，層位の新旧がそのまま遺物の新旧関係を表すと考えられる。(辻田)



第11図　32区北壁土層図(1/50)

第２節　遺構（第12図，図版６）

柱穴と考えられるPitが２基検出されている。第Ⅴ層の旧石器時代遺物包含層除去後に平面プランが確認されており，旧石器時代の遺構と判断した。第Ⅳ層と第Ⅴ層は色調・土質が類似しているが，第Ⅴ層中に旧石器時代の遺物が包含されていることから，第Ⅴ層はかなり慎重に調査を進めたつもりである。よって，本来は第Ⅴ層中やそれより上位で遺構が検出されていた，ことに気がつかなかったということは考えられない。いずれも平面プランは円形で深さ約40㎝，ほぼ垂直に掘り込まれている。覆土は第Ⅴ層が充填されており，暫定的だが第Ⅴ層石器群に伴う遺構と考えておきたい。(辻田)



第12図　32区検出Pit１・２(1/80･1/40)

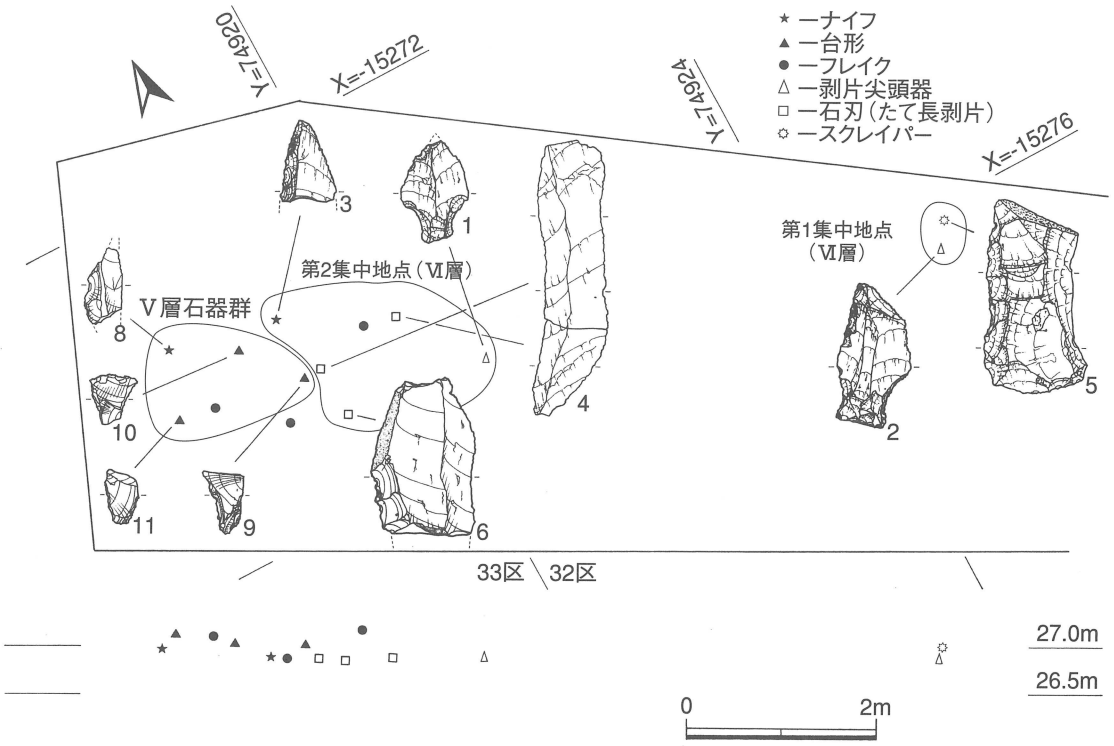
第３節　層位出土の遺物（第13図，第14図，第３表，図版12）

旧石器時代の遺物は32区・33区より検出されている。調査区は遺跡の所在する丘陵の中央部に近く，平坦で土層の堆積が良好である。遺物の検出された第Ⅴ層と第Ⅵａ層上位～中位は連続する土層であるが，明瞭な土質の変化が確認でき，完全に分層できる。火山ガラス比分析の結果，第Ⅳ層上部付近がアカホヤ火山灰降灰層準，第Ⅵａ層下部がAT火山灰降灰層準となっている。よって，今回出土の石器群はAT降灰後，アカホヤ火山灰降灰以前の２時期にわたるもので，第Ⅵａ層出土石器群はAT降灰層準直上に包含されおり，比較的AT火山灰降灰期に近い時期の石器群と理解できよう。また，出土数は少ないものの，石器の石材・組成についても各層で変化が大きい。第Ⅵａ層では無斑晶質安山岩製の石器が主体を占め，典型的な縦長剥片剥離技術の存在が見て取れる。剥片尖頭器・ナイフ形石器・削器・縦長剥片が検出されている。第Ⅴ層では一転して，黒曜石製の石器が主体となり，小型の台形石器とナイフ形石器の組み合わせとなる。台形石器には百花台型台形石器が含まれ，第Ⅵａ層石器群よりも後出の様相を呈しており，出土層序との整合性も保たれている。いずれの層位の石器群も砕片類がほとんど出土せず，石器のほとんどがトゥールまたは素材剥片であることが特徴的である。

(1)　遺物の分布（第13図）

遺物の分布は，第Ⅵａ層では２ヶ所，第Ⅴ層では１ヶ所である。

第Ⅵａ層の石器群は２ヶ所に分かれ，第１集中地点は削器と剥片尖頭器の２点，第２集中地点はナイフ形石器，剥片尖頭器，縦長剥片２点等からなる。第２集中地点では近接する位置で接合資料もありいずれの石器も比較的原位置に近い状況と判断される。出土点数が少なく多くを検討することはできないが，石器製作を行う拠点的な遺跡ではなく，一時的に滞在するキャンプサイト的な遺跡と理解できよう。また，剥片尖頭器やナイフ形石器と幅や厚さ石材などが規格された未加工の良好な縦長剥片の存在は，狩猟などを行う移動の際にトゥールの素材となる剥片を同時に持ち歩いていた様子がうかがえる。



第13図　32・33区出土石器分布図(1/80)

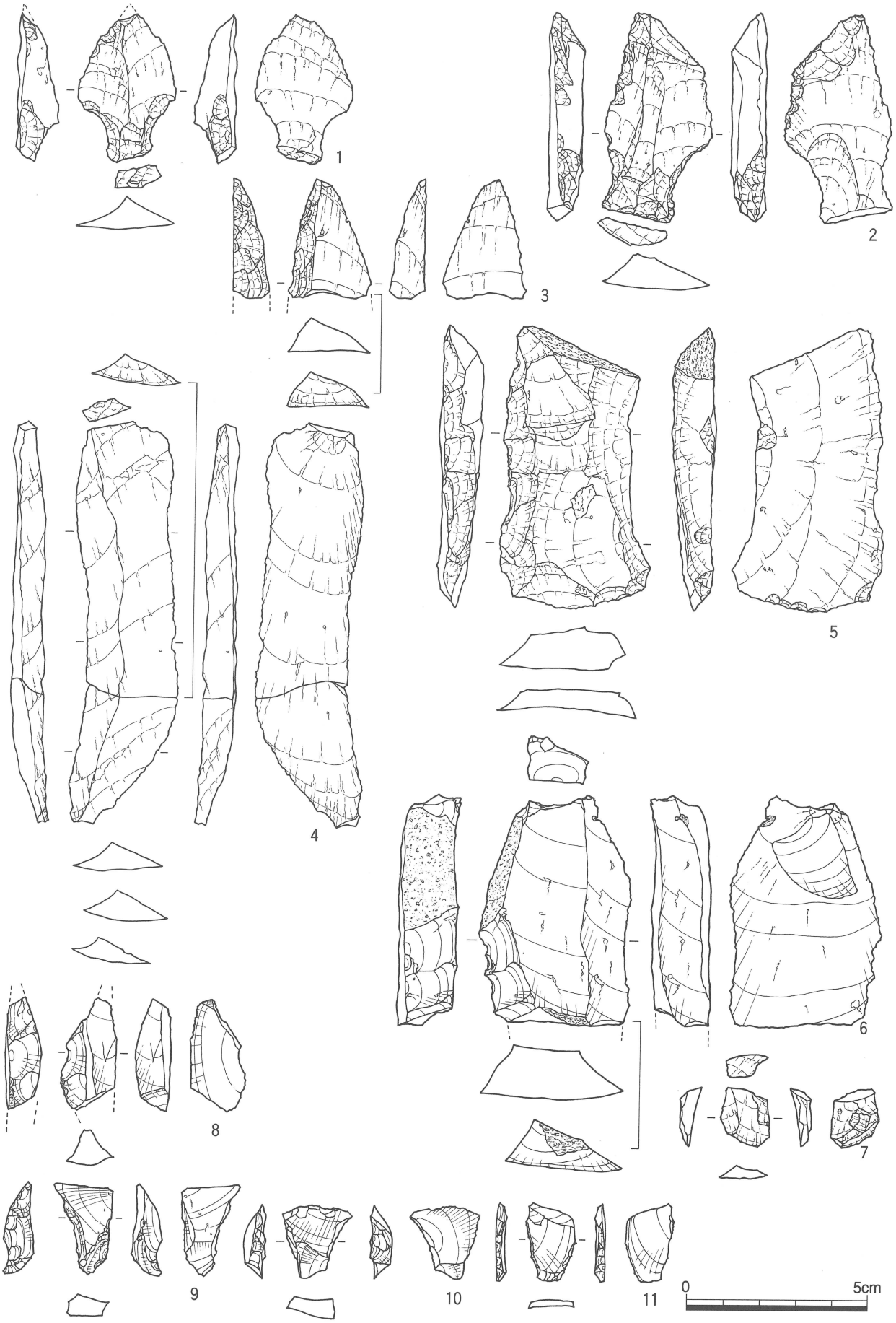
(2) 遺　　物

ー第Ⅵａ層ー（第14図１～７，第３表，図版12）

1は無斑晶質安山岩製の剥片尖頭器で，先端部を当時の折れで欠損するもののほぼ完形で，左右対称の整った形状を呈する。先細りの縦長剥片を素材とし，基部側は両側縁に主要剥離面側から粗い剥離によってノッチ状の調整を行い，基部形状はバチ状を呈す。また，打面側から背面側に１度平坦剥離を行っている。先端部は左側縁に主要剥離面側から３度の小剥離が行われているが，ほとんど素材剥片の形状を残している。素材剥片の打面は単剥離面打面である。**2**も無斑晶質安山岩製の剥片尖頭器で，完形である。石器の形状は，素材剥片剥離の際の加撃軸と石器の器軸がずれており，やや右寄りの歪な形となっている。素材剥片の最長部分を活かそうとしたためであろう。基部側は両側縁に主要剥離面側からノッチ状の調整を行い，基部形状はバチ状を呈す。また，打面側から背面側には平坦剥離を行っており，その調整は１よりも顕著である。先端部の調整は，右側縁は背面から主要剥離面側へ，左側縁は主要剥離面側から背面側へ行われる。しかしながら辺縁部のみにとどまり，素材剥片の形状を大きく変更しない。素材剥片の打面は単剥離面打面である。**3**は無斑晶質安山岩製のナイフ形石器で基部側は当時の折れにより大きく欠損する。通常ナイフ形石器は素材剥片の主要剥離面側からブランティング加工により整形されるものが多いが，本資料は背面側からの粗いブランティング加工によって整形されている。したがって，ａ面が主要剥離面である。かなり幅広の縦長剥片を素材として，ブランティング加工により大きく幅を減じられたと考えられる。**4**は無斑晶質安山岩製の縦長剥片で２点の接合資料である。下端部は調査時の欠損である。背面の右半分には右下方からの剥離が見てとれるが，縦長剥片剥離の際の剥離痕ではなく，石核調整時の大きな剥離痕と考えられる。左側の剥離は本資料に先行して同様の縦長剥片を剥離した際の剥離痕と考えられる。長さは違うが，１や２の剥片尖頭器や若干幅広と考えられるが３のナイフ形石器素材と厚さや幅が同様であり，これらトゥールの素材剥片と考えられる。また，肉眼観察ではあるが３とは同一母岩と考えられる。**5**は無斑晶質安山岩製の削器で厚い横長の剥片を素材とし，上端面は礫面である。素材剥片は打面を頻繁に転移する石核から剥離されており，右側縁は素材剥片剥離と同時に節理面からの剥離によって，背面側に丸みを帯びた形状をなす。左側縁は主要剥離面側からの大きな剥離を行い刃部を形成している。また，下端部には背面側から小さな剥離がはいる。使用によるものであろうか。本資料は第Ⅴ層からの出土であるが，石器の素材・風化度などから，本来は第Ⅵａ層に包含されていたと考えられる。**6**は第Ⅵａ層出土資料では唯一黒曜石を素材としている。連続した縦長剥片剥離を行う石核から剥離された剥片を素材としており，加工痕のある縦長剥片である。石材は青灰色黒曜石である。左側縁には礫面が残り，それを除去するように主要剥離面側から３度の大きな剥離痕がみられる。下部は当時の折れで節理面から折れており，左側縁最下に主要剥離面側から見られる剥離の後のものである。また，左側縁の剥離は大きく，鋸歯状になるように行われている。打面調整は，背面に見られる２度の剥片剥離の後に，背面側から行われているが，石核の打面全体を再生するような大きなものではなく部分的なものである。幅も厚さもありかなり大型の石核が想定される。**7**は無斑晶質安山岩製の剥片で，連続する縦長剥片剥離を行う石核の打点部分の調整剥片か，剥片尖頭器作成時の打面側から背面側への調整剥片か，または，縦長剥片剥離を行った際の失敗した剥片か，主容剥離面側の下方は階段状剥離となっている。打面は単剥離面打面である。

ー第Ⅴ層ー（第14図８～11，第３表，図版13）

8は灰白色黒曜石のナイフ形石器で分厚い横長の剥片を素材とする。先端部と下部は当時の折れにより欠損している。背面中央の白抜き部分は発掘時のガジリにより剥離しており，ちょうど中央の稜部分が失われている。左側縁は主要剥離面側及び背面の稜部分から交互に大きな剥離で調整され，打面は除去されている。また，左側縁の下部には一部礫面が残っており，大きな剥離は礫面除去の意識



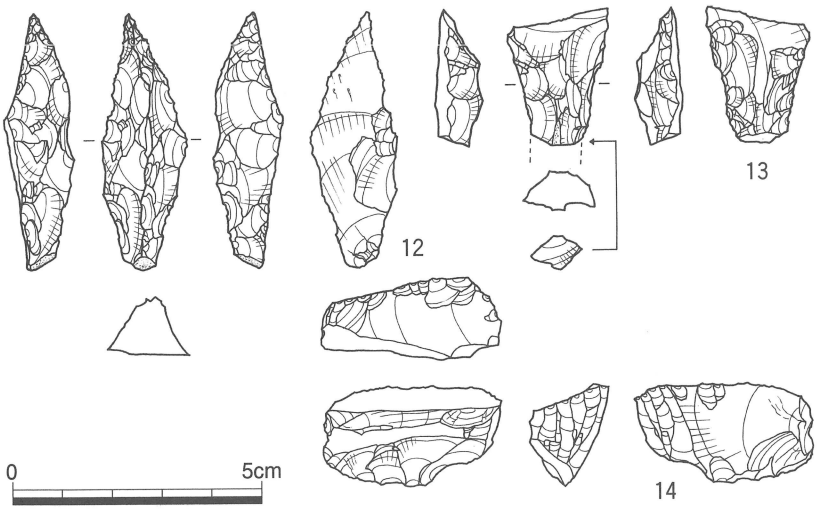
第14図　層位出土の旧石器時代の石器(2/3)

もあるものと考えられる。素材の灰白色黒曜石は県内では東彼杵町椎葉川で多く見られるが，最近の踏査では佐世保市古里でも採取可能とのことである（註１）。**9**は黒色黒曜石製の台形石器で厚めの剥片を素材とするが，刃部付近の主要剥離面側の剥離方向と，背面の剥離方向が同様の向きとなり，どのような作用で剥離されたものかわからない。左側縁は主要剥離面側から粗い調整を行った後，細かい調整により内湾状に仕上げている。右側縁の上半は折れ面または切断面で，下半は粗い調整の後細かい調整により下部がすぼまるような形状となる。**10**は黒色黒曜石製の台形石器で，打面転移を頻繁に繰り返す石核から剥離された厚めの不定形剥片を素材とする。左側縁は主要剥離面側から，右側縁は背面側からのブランティング加工により平面形逆台形に整形されている。上端及び下端は素材剥片の辺縁部を残すが，上端背面に見られる剥離は発掘時のものである。**11**は黒色黒曜石製の台形石器で，薄い幅広の剥片を素材とする。素材剥片の背面の剥離痕から打面を固定して剥片剥離を行っている様子が見て取れる。上端と下端は素材剥片の辺縁部で，両側縁は主要剥離面側から細かい調整を行い下部がすぼまるような平面形逆台形をなす。また，両側縁は主要剥離面側からの剥離を行う前に折り取られている様子が看取できる。形態的には百花台型台形石器の範疇に入るものであろう。（辻田）

第４節　層位外出土遺物（第15図，第３表，図版13）

12は黒曜石製の三面加工尖頭器で31区検出の弥生時代の住居跡覆土遺物である。基部側に素材剥片剥離時の打面が残る。また，同じく基部側に礫面が見られるが礫面が打面ではない。厚い幅広の剥片を素材とし，主要剥離面側からの調整によって整形されているが，部分的に稜上調整剥離も施される。特に先端部は丁寧な剥離によって尖頭部を作り出している。主要剥離面側は左側縁から４度の平坦剥離が施されるが，側縁調整剥離以前に施されている。断面形状は三角形を呈す。主要剥離面側にも剥離が入っており，角錐状石器とは区別して三面加工尖頭器とした。**13**は黒曜石製の台形石器で表土中の資料である。その形状から枝去木型台形石器の範疇にはいるものであろう。基部側は当時折れによる欠損である。厚い剥片を素材として，両側縁の剥離は，背面側の両側縁から主要剥離面側への粗い平坦剥離→主要剥離面側から背面側への粗い調整剥離→背面側から主要剥離面側への細かい平坦剥離，の順に施されている。また，主要剥離面側の平坦剥離は階段状剥離となり中央部は素材剥片の主要剥離面が残っている。基部形態は欠損して不明だが，刃部に最大幅を持つバチ状を呈す形態となろう。**14**は黒曜石製の細石核で古代の溝状遺構（第30図）覆土遺物である。十園遺跡では唯一の細石器文化期の遺物である。分厚い剥片を素材として，下縁調整は主要剥離面側から顕著に行われる。打面調整は主要剥離面側から行われるが辺縁部にとどまる。また，実測図では，打面は作業面方向からの剥離により作出されているようにみえるが，素材剥片剥離前の剥離面である。背面側の中央部に走る横方向の白抜き部分は発掘中のガジリである。形態的には船野型細石核と言えないこともない。

（辻田）



第15図　層位外出土の旧石器時代の石器(2/3)

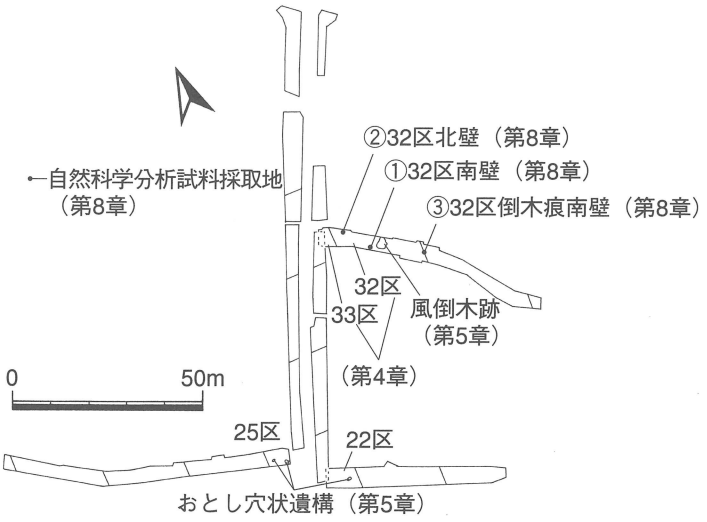
註
１　福岡旧石器文化研究会
　　山下　実氏の指摘による。

参考文献
萩原博文1996「第２章　平戸の旧石器時代」『平戸市史　自然・考古編』長崎県平戸市
旧石器文化談話会『増補改訂　旧石器考古学辞典』学生社

第３表　32区・33区旧石器時代出土石器計測表

図	番号	区	層位	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重 量（g）	備　考
	1	32	Ⅵa	剥片尖頭器	無斑晶質安山岩	4.10	2.70	1.15	8.40	
	2		Ⅵ	剥片尖頭器	無斑晶質安山岩	5.80	3.00	1.00	16.10	
	3	33	Ⅵa	ナイフ	無斑晶質安山岩	3.30	2.30	1.00	5.20	
	4		Ⅵa	縦長剥片	無斑晶質安山岩	11.00	3.00	1.10	26.00	接合資料
	5	32	Ⅴ	スクレイパー	無斑晶質安山岩	7.80	4.20	1.20	41.00	
	6	33	Ⅵa	加工痕のある縦長剥片	青灰色黒曜石	6.35	4.20	1.70	53.70	下部欠損（当時）
	7		Ⅵa	調整剥片	無斑晶質安山岩	1.65	1.40	0.60	0.90	階段状剥離
	8		Ⅴ	ナイフ	黒曜石	3.10	1.55	1.00	3.60	椎葉川産？
	9		Ⅴ	台形	黒曜石	2.50	1.65	0.85	2.20	
	10		Ⅴ	台形	黒曜石	2.00	1.90	0.60	1.50	
	11		Ⅴ	台形	黒曜石	2.15	1.40	0.30	0.80	百花台型
	12	32	表土	三面加工尖頭器	黒曜石	5.10	1.75	1.40	7.80	
	13	18	表土	台形	黒曜石	2.75	2.00	0.95	4.00	枝去木型
	14	13	古代溝	細石核	黒曜石	2.00	3.55	1.60	10.20	

※第４章，第５章の関連遺構及び第８章の自然科学分析試料採取地点は右図のとおりである。第５章の風倒木跡と第８章の32区倒木痕南壁は別の遺構であるのでご注意願いたい。第８章32区倒木痕南壁からのサンプリングは，32区と31区にまたがる風倒木跡の断面観察用トレンチの南壁から採取したものである。

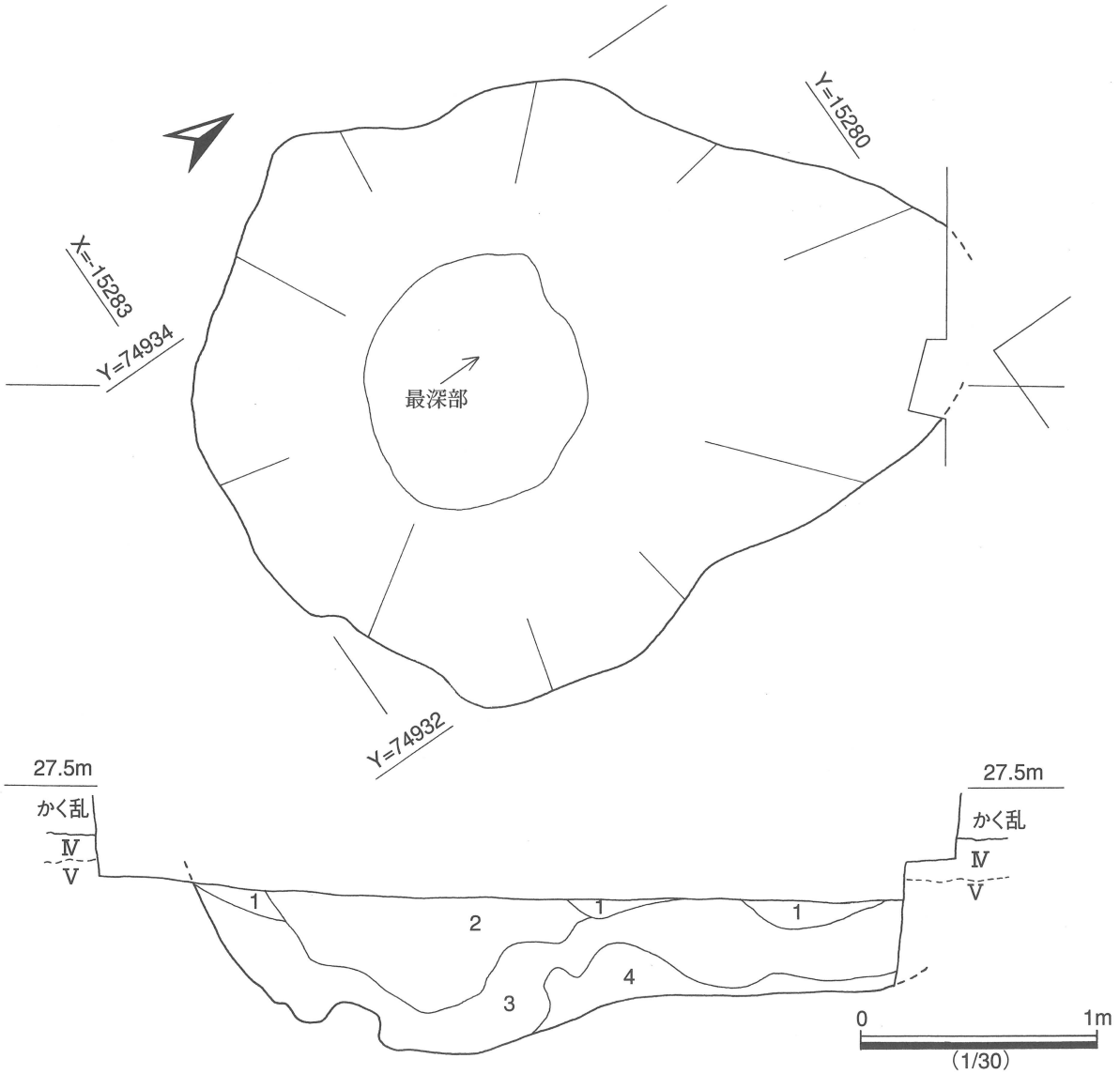


十園遺跡旧石器・縄文及び自然科学分析関連位置図（1/2,000）

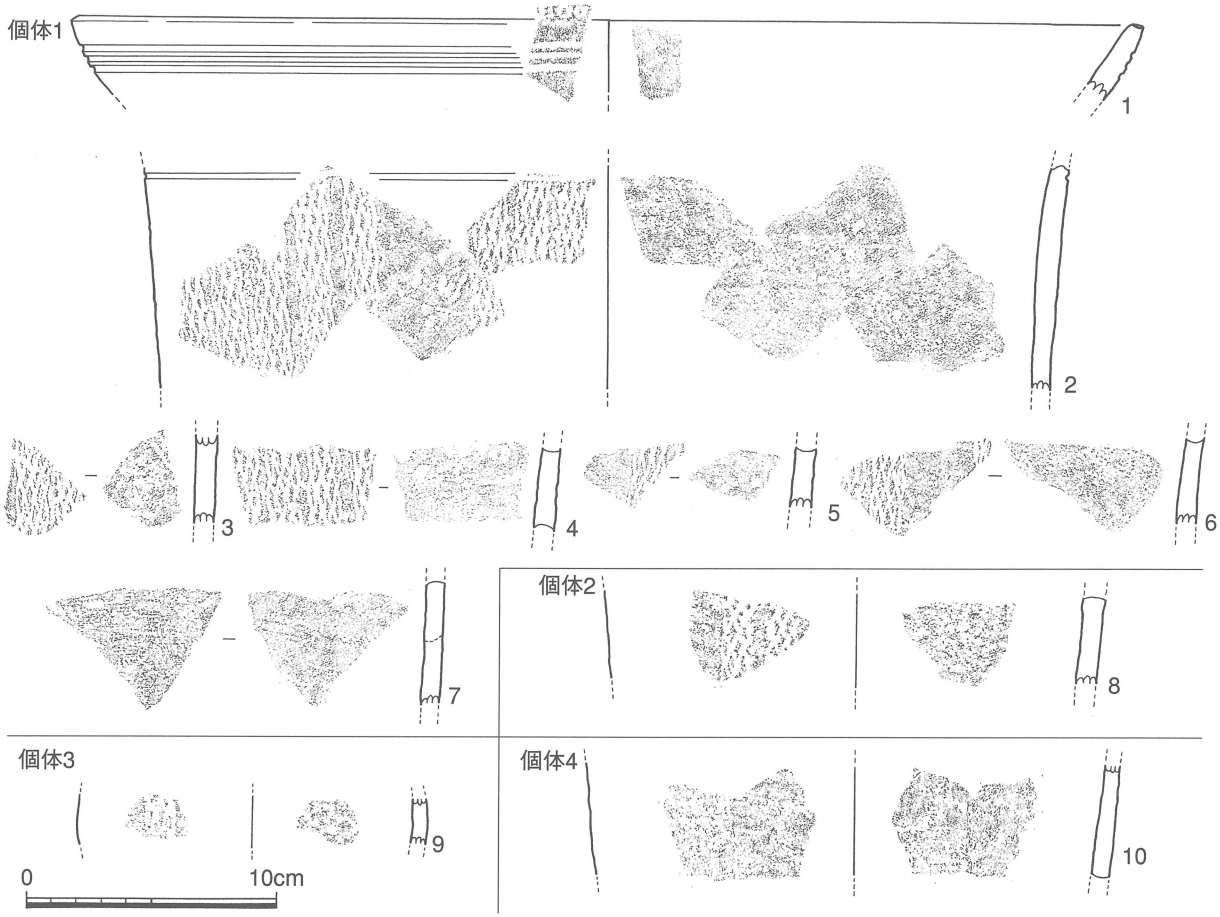
第５章　縄文時代

第１節　風倒木跡（第16図，第４表，図版７．14．15）

32区より風倒木跡と考えられる落ち込みが検出されている。落ち込みの中からは後述する平栫様式土器が検出されており，縄文時代の所産として報告する。落ち込みは第Ⅳ層上面に掘り込まれた古墳～古代のピット群を発掘中に，ピット内面の土層の不整合が見られ，第４層下位に遺構の存在する可能性が考えられたため，ピット群の調査終了後検出した。アカホヤ火山灰降灰層準である第Ⅳ層を除去後に平面プランが検出されており，アカホヤ火山灰降灰以前の風倒木跡と理解できるであろう。また，検出された縄文土器からおおむね早期後半平栫様式土器期のものと考えられる。ただし，風倒木跡から検出された土器片が，風倒木跡成形時に使用されていたのか，または，すでに廃棄された状態であったのかは判断ができない。したがって，厳密に言えば早期後半平栫様式土器期からアカホヤ火山灰降灰期の間に成形された風倒木跡であろう。平面プランはやや歪な卵形で，北東側の一部は調査区外に広がっているが，わずかな範囲と考えられる。落ち込みの最深部は中央部より南西側にずれた位置にあり，北側方向にはなだらかな傾斜である。また，最深部上方に堆積する２層は第Ⅵ層・第Ⅶ層・第Ⅷ層がブロック状に堆積しており，樹根と共に持ち上げられた土塊が崩落した部分であろうか。落ち込みの形状や土層の堆積から，北東方向への倒木と考えられる。（辻田）



第16図　32区風倒木跡(1/30)



第17図　32区風倒木跡検出縄文土器(1/3)

ー出土土器ー

前述の風倒木跡からまとまって早期後半の土器片が検出されている。一部第Ⅳ層や表土中の資料があるが，風倒木跡出土資料と接合関係があるなど，後世のかく乱等により遺物が動いている。土器片の残存状況は比較的良好で４個体に分別できる。【個体１】**１**～**７**は色調・胎土・器面調整・残存状況などほぼ同様で，また，外面の撚糸文についても同じ原体を使用しており，同一個体と判断した。ほぼ直立する胴部に短く外反する口縁部，胴部には数条単位の撚糸文を無文部を挟んで施文，それに直行するように３条を単位とする沈線を施文する。復元口径は41.2cmを測る。新東晃一氏の設定する栫ノ原式土器の範疇で捉えられよう。破片資料ばかりで断片的ではあるが，外面の文様は１単位５条以上の撚糸文帯と，36mm（第17図２より），28mm（第17図６より），70mm以上（第17図７より）の無文部分を交互に施文している様子がうかがえる。撚糸文の施文方向は拓影から不統一であることが判る。【個体２】**８**は色調や撚糸原体，復元径が異なり別個体と判断される。個体１と同様に栫ノ原式土器でやや小型のタイプである。【個体３】**９**は細片であるが復元径14cmを測る。以上の３個体は同様の器形で同様の文様構成と考えられるが，大きさについては大・中・小の３タイプがあることが判る。【個体４】**10**は無文土器と考えられる。風倒木跡の資料であり，どこまでその共伴関係が確実なものかは慎重に判断せねばならないが，現時点では共伴する無文土器と考えておく。以下，個別に紹介する。【個体１】**１**は口縁部で直線的に外側に開き，復元径は41.2cmを測る。器壁の厚さは約10mm，器面調整は内外面ともに横位のナデである。外面には先端の丸い棒状工具により，幅３mmの横位の沈線文が３条単位で施文され，口唇部には幅３mmの刻みが施される。**２**は口縁部直下の胴部片で４点の接合資料である。実測図上端で復元径は36.8cmを測る。器壁の厚さは約10mm，器面調整は内外面ともに横位のナデである。外面には幅13mmの縦位の撚糸文を３mm～５mm間隔で５条施文し，約36mmの無文部を挟

んで同様に３条の撚糸文を施文する。実測図上端は輪積痕が残っており，１の口縁部に続く屈曲部直下と考えられ，口縁部と同様な沈線文を１条施文する。また，文様ではないが，無文部に長さ６㎜，幅３㎜の楕円形の植物種子圧痕が観察される。**3**は胴部片で，器壁の厚さは９㎜，器面調整は外面はナデ，内面は横位のナデである。外面には幅13㎜の縦位の撚糸文を４㎜間隔で２条施文する。**4**は胴部片で，器壁の厚さは９㎜，器面調整は外面はナデ，内面は横位のナデである。外面には幅13㎜の縦位の撚糸文を３㎜～４㎜間隔で４条施文する。実測図上下端は輪積痕である。**5**は胴部片で，器壁の厚さは９㎜，器面調整は外面はナデ，内面は横位のナデである。外面には幅13㎜の縦位の撚糸文を３㎜間隔で２条施文する。実測図上端は輪積痕である。**6**は胴部片で，器壁の厚さは８㎜，器面調整は内外面ともに横位のナデである。外面には幅13㎜の縦位の撚糸文を３㎜間隔で２条施文し，約28㎜の無文部を挟んで同様に撚糸文を施文する。実測図上端は輪積痕である。**7**は胴部片で，器壁の厚さは８㎜，土器片の幅70㎜，器面調整は内外面ともに横位のナデである。内外面ともに文様はなく，胴部の無文部分と考えられる。

【個体２】**8**は胴部片で，実測図上端で復元径20㎝を測る。器壁の厚さは９㎜，器面調整は内外面ともにナデである。外面には幅11㎜の縦位の撚糸文を７㎜間隔で２条施文する。実測図上端は輪積痕である。

【個体３】**9**は胴部片で，実測図上端で復元径14㎝を測る。器壁の厚さは６㎜，器面調整は内外面ともにナデである。外面には幅13㎜の縦位の撚糸文を１条施文する。

【個体４】**10**は無文土器の胴部片で，実測図上端で復元径21.4㎝を測る。器壁の厚さは７㎜，器面調整は内外面ともに横位の条痕ののち，横位のナデである。内外面ともに文様の施文は見られない。７と同様に無文部分の胴部片とも考えられるが，色調・胎土・器面調整・残存状況などは１～９と比べると明らかに異なる。また，図示していないが10と同一個体と考えられる破片にも文様は見られず，無文土器の胴部と考えている。（辻田）

参考文献

新東晃一1998「塞ノ神式土器再考」『九州縄文土器編年の諸問題』九州縄文研究会

第４表　32区風倒木跡出土早期土器観察表

図	番号	層位	個体番号	部位	色調 外面	色調 内面	胎土	残存状況（器壁表面）	文様 外面	文様 内面	器面調整 外面	器面調整 内面	備考
17	1	風倒木跡	1	口	7.5YR･5/4	7.5YR･5/4	石･角･白･赤	良好だが表面はもろい	幅３㎜の横位の沈線文	なし	ヨコナデ	ヨコナデ	口唇部に幅３㎜の刻み目
	2			胴	7.5YR･4/2	10YR･5/4	石･角･白･赤	良好だが表面はもろい	幅13㎜の縦位の撚糸文を３㎜～５㎜及び36㎜の無文部を挟んで８条施文 実測図上端に幅３㎜の横位の沈線文	なし	ヨコナデ	ヨコナデ	実測図上端で復元径36.8㎝ 無文部に長さ６㎜，幅３㎜程の植物種子圧痕５ヶ所有り
	3			胴	10YR･4/4	10YR･6/6	石･角･白･赤･黒	良好だが表面はもろい	幅13㎜の縦位の撚糸文を４㎜の無文部を挟んで２条施文	なし	ナデ	ヨコナデ	
	4	表土		胴	10YR･4/4	10YR･6/6	石･角･白･赤･灰安	良好だが表面はもろい	幅13㎜の縦位の撚糸文を３㎜～６㎜の無文部を挟んで４条施文	なし	ナデ	ヨコナデ	実測図上端及び下端は輪積痕
	5	風倒木跡		胴	10YR･4/4	10YR･6/6	石･角･白･赤	良好だが表面はもろい	幅13㎜の縦位の撚糸文を３㎜の無文部を挟んで２条施文	なし	ヨコナデ	ヨコナデ	実測図上端は輪積痕
	6			胴	10YR･3/2	10YR･5/3	石･角･白･赤	良好だが表面はもろい	幅13㎜の縦位の撚糸文を３㎜及び28㎜の無文部を挟んで３条施文	なし	ヨコナデ	ヨコナデ	実測図上端は輪積痕
	7	Ⅳ		胴	10YR･5/2	7.5YR･5/4	石･角･白･赤･灰安	良好だが表面はもろい	なし	なし	ヨコナデ	ヨコナデ	深鉢胴部の無文部分。幅７㎝
	8	表土	2	胴	7.5YR･6/6	10YR･7/1	石･角･白･赤･角安	良好だが表面はもろい	幅11㎜の縦位の撚糸文を７㎜の無文部を挟んで２条施文	なし	ナデ	ナデ	実測図上端で復元径20㎝
	9	風倒木跡	3	胴	10YR･7/4	5YR･4/1	石･角･白･赤	良好だが表面はもろい	幅13㎜の縦位の撚糸文を１条施文	なし	ナデ	ヨコナデ	実測図上端で復元径14㎝
	10		4	胴	10YR･4/1	10YR･4/2	石･角･白	良好	なし	なし	条痕後ヨコナデ	条痕後ヨコナデ	実測図上端で復元径21.4㎝

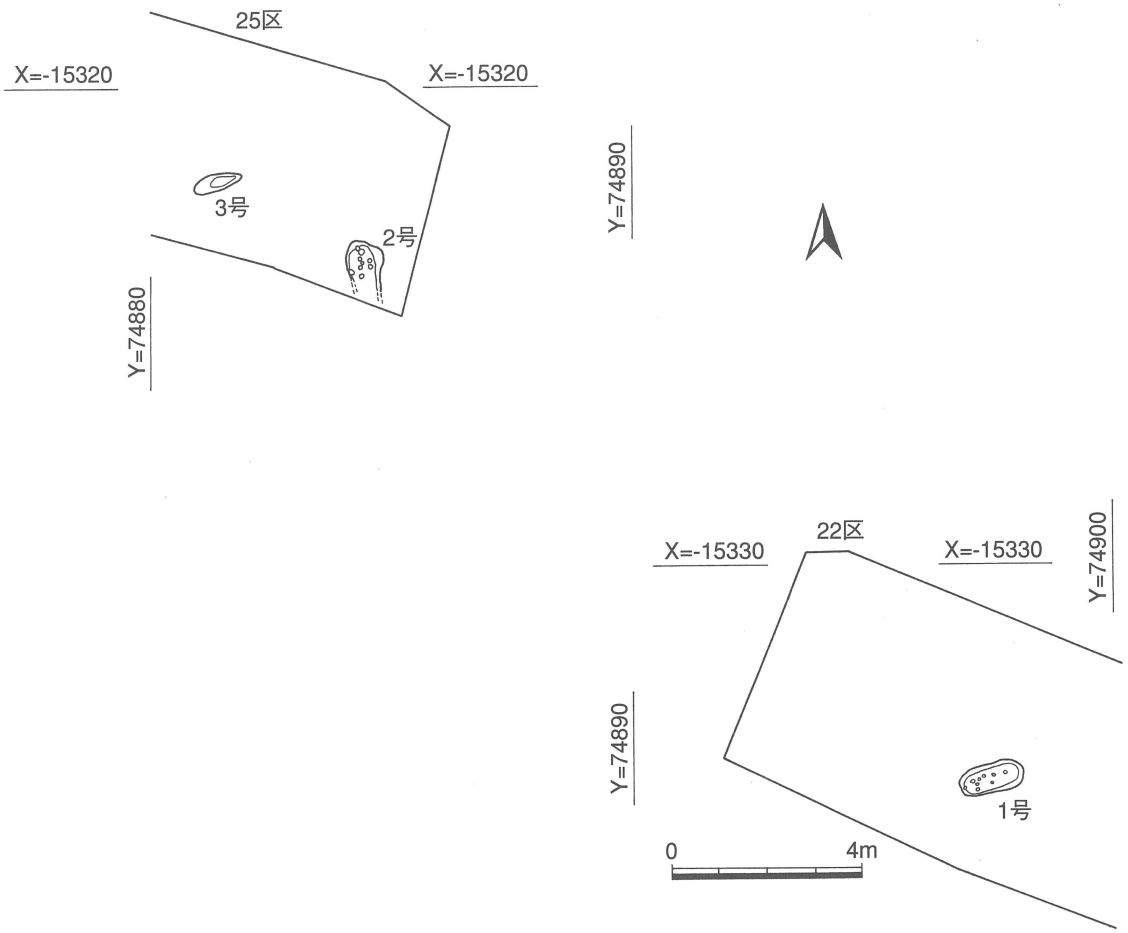
※胎土表記　石＝石英，角＝角閃石，白＝白色粒子，赤＝赤色粒子，黒＝黒曜石片，灰安＝灰色安山岩粒子，角安＝角閃石安山岩粒子

第２節　おとし穴状遺構（第18図，第19図，第５表，図版７，第８章）

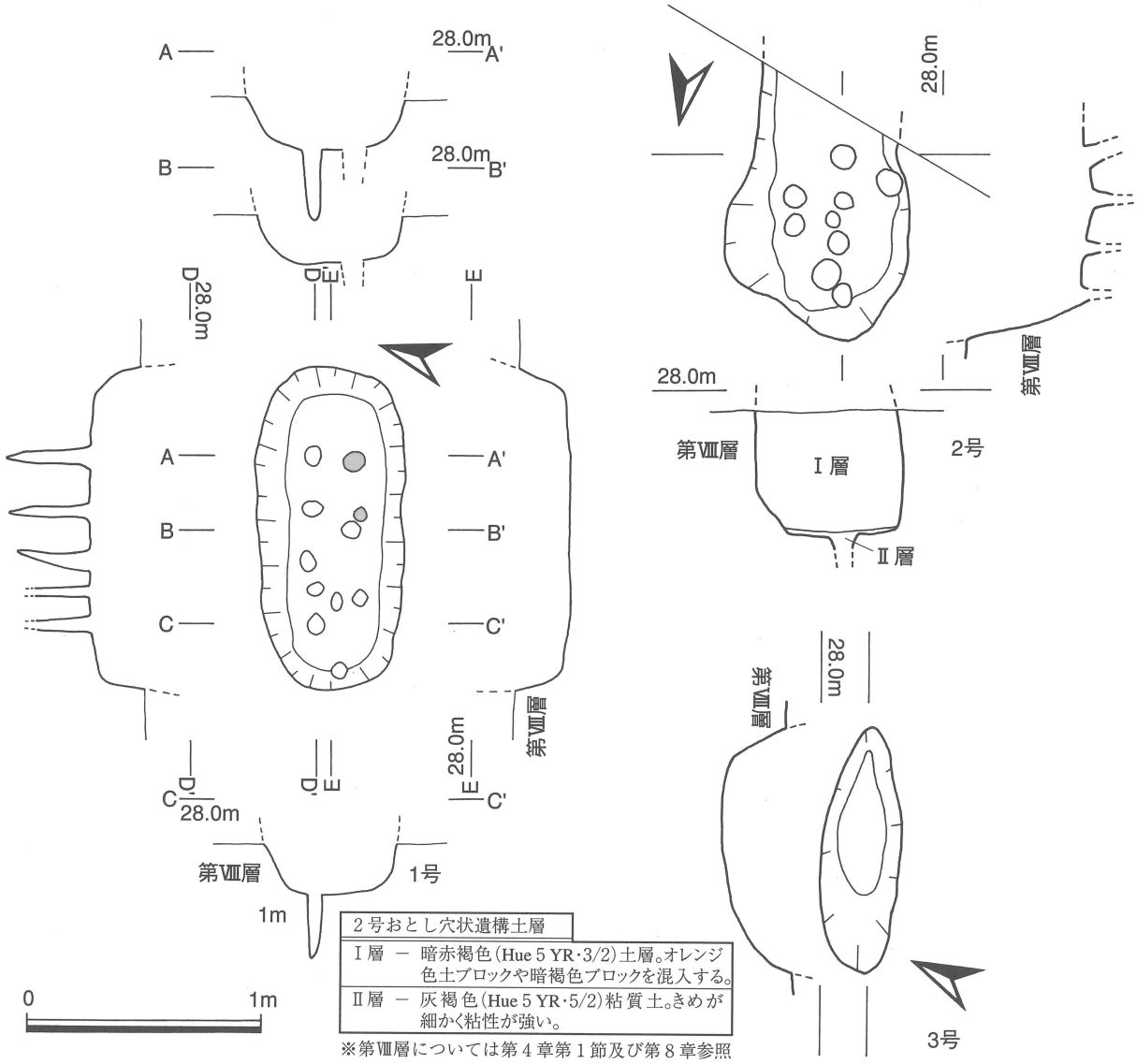
今回縄文時代の遺構として取り上げるのは３基のおとし穴状遺構(註１)である。第８章まとめでも検討するが，縄文時代の遺構としての明確な根拠はまったくない。長崎県内のこれまでのおとし穴状遺構の報告を見ても，遺構周囲の出土遺物や遺跡の内容から「おおむね縄文時代」の所産であろうと考えられているものが多い。しかしながら，全国的に見れば旧石器時代から現代にいたるまでおとし穴状遺構は製作・使用されてきており，その時期決定の難しさは多くの研究者によりすでに指摘（今村1994　他）されている。今章においてとりあえず報告するが，詳細については後述（第８章まとめ）する。

－遺構の配置－（第18図）

おとし穴状遺構は22区及び25区より３基検出された。緩やかに北向きに傾斜する丘陵の平坦部を，東西に横断するように直線的な配置を見せる。検出地点の標高は27.8m～27.9mほどであるが，後世の削平をかなり受けており，当時の掘り込み面の標高を如実に表しているとは思えない。既存の道路により１号と２号の間が確認できないが，１号と２号の間が17.5m，２号と３号の間が3.5mを測る。また，１号と３号は遺構の長軸が丘陵の走行に直行するように配されているが，２号は90度ずれて丘陵の走行に並行する。おとし穴状遺構の配列がさらに続いている可能性もあるが，第19図断面図を見てもらうと分かるように，ほぼ底面付近しか残存しておらず，削平されてしまっている可能性もある。ただし，調査時にはその可能性も考え，底面に穿たれた小ピットの痕跡までは削平されていないであろうと，かなり詳細に遺構の検出作業を進めている。しかしながら小ピットの検出には至らず少なく



第18図　22・25区おとし穴状遺構配置図(1/160)



第19図　22・25区おとし穴状遺構(1/30)

とも1号・2号のような小ピットを有するようなおとし穴状遺構は調査範囲には存在しないようだ。

－遺構－

3基はいずれも第Ⅷ層上面での検出であるが，上部は削平されており本来の掘り込み面は不明である。内部からの遺物の出土は2号おとし穴状遺構から黒曜石の砕片が1点検出されているのみである。内部の土層堆積はいずれもほぼ同様であるが，2号のみ若干説明を述べる（第19図2号）。2層に分かれⅠ層は暗赤褐色土層で，やや粘性がありオレンジ色土のブロックの混入が見られる。Ⅱ層は灰褐色土層できめが細かい。底面に張り付くように薄く検出されている。自然化学分析を実施していないが，Ⅰ層に含まれているオレンジ色土はアカホヤ火山灰であろうか。仮にアカホヤ火山灰とした場合，このおとし穴状遺構はアカホヤ火山灰降灰以降に掘削されたものと考えられる。また，Ⅱ層は，おとし穴状遺構のカモフラージュのために遺構上面を覆っていた小枝や木の葉等が落ち込んだものであろう。

1号は，検出プラン隅丸長方形で長軸1.4m，短軸0.62m，深さ0.2mを測る。底面も隅丸長方形でフラットであり直径8㎝～9㎝，深さ25㎝～30㎝の小ピットを11ヶ所検出している。第19図1号おとし穴状遺構実測図断面D－D´では小ピットが一列に並んでいる状況が確認され，遺構の長軸方向に